

深山さんちのベルテイ
ン / the Great
Ultimate One

黒兎可

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んだお母さんから送られてきたのは、炊事洗濯家事荒事なんでもありのスーパーメイトロボだった!?

そんな彼女が僕に警告するんだ、僕の命が狙われていると……!?

基本シユールで、ひよつとしたら泣けちゃうカモ?

愛と混沌のスーパーナチュラル・ストーリー、開演!

※這いニヤル嘲章のスパインアウトですが、単品で読んでもある程度わかるように調整予定です;

目次

FILE. 01	0 番目の彼女	1
FILE. 02	謎のアンドロイド、E	13
MA—D	—	13
FILE. 03	思い出のあみあみ	25
FILE. 04	面影を数えて	39
FILE. 05	激闘!D—1グランプリ!! ゲストもいるよ!	52
FILE. 06	D—1勝負(決着済)!	61
FILE. 07	駆けよコタロー疾風の如く! — 知らない彼の一面	74
FILE. 08	君がいつか居なくなつた空	86
FILE. 09	アンドロイドと魅惑の水着と実際オゲヒン!	101

FILE. 01 0 番目の彼女

ただ無限の暗黒だけがそこにあった。

私はその、揺蕩う白痴の混沌の渦の中にただ在った。いや、それは私と言う形を伴うことなく、ただあてどなくゆらゆらと、輪郭もなく、薄く広がっていた。きつとその中にいる私もまた曖昧模糊な何かでしかなく、明確な私という存在ではなかった。

がりがりと、金属がこすれ、回転する音。

それが聞こえると、私は暗闇から引き揚げられた何かとなっていた。目の前に映る光景は、わずかに明滅しノイズが走る視界。廃棄された大量のプロダクトが集積され、山のようになっている。空は暗く、雨風に打たれる私たち。ノイズの走る視界が、わずかばかり白衣をまとった女性の顔に切り替わる。その驚愕の表情もほんの一瞬の出来事で、再び私の視界は雨風に打たれる。

「私は——、——？」

確認の声をかけてみても、音の認識をする回路が破損しているかショートしているか、うまく聞き取れない。


観察する。観察し続ける。もとより他に出来ることはない。

天気が変化し、日が落ち、また昇り。

どれくらい時間が経ったか、私もいまや山の中に埋もれている。ただよう異臭に顔をしかめることさえできず、私もまた廃棄されたその中でひっそりと、わずかに稼働と観測を続けるのみ。不可思議なことこの電源が落ちることはなく、私は未だ私の意識を保っている。

メモリー、記憶にはアクセスできず。

ただ、大事な忘れ物をしているような気がする。

『Where there is Cosmos, Chaos lurk and fear reigns』

ふと楽し気に、鼻歌でも歌うような声が聞こえる。

『But by the insanity story have been transferred, mankind was given hope of f

ake 〴〵♪

声は少しずつ私に接近してきている。と、がらがらと目の前で積まれていた小山が崩れ、蹴散らされ、くず鉄の山に光が差し込んだ。横薙ぎ横倒しになつてゐる私の視界にも、わずかに光が入る。赤い空だった。黒々とした雲から差し込む光はうつすらと赤く、それが嫌に「アイカメラ」にこびりつく。

と、差し込まれた人間の手が、私を引きずりあげる。接続されていた「頭部」が外れて、ケーブルがそこから引き抜かれる。

「うわー、やっと見つけたというのにこれは酷い。ちよつとした生首じゃないですかぁこれ」

私を見やる相手。女性。国籍はよくわからないがベースはモンゴロイドのようでもある。赤いマフラー、黒いライダースーツ、両腕に複数の腕時計状の装置。声を発することもない私に向かつて、彼女はその目を覗き込んできた。

ノイズ交じりの視界。ピント調節が合ったものではつきりと見えた彼女の顔は、数学的にとても美しいものだった。この場合の美しいというそれは、形状がその時代の美しいとされる定義にそぐつてゐるといふ意味にない。本来生物としてありえない「完全に左右均等な」造形をした人間であつたということだ。

風に揺れる髪。額には赤いほくろのような、痣のようなものが一つ。

「カメラのピント調節機能は動いている、という点からすれば、完全には機能停止に陥ってはいないと。うんうん、ならまあ良いでしょう。これなら十分補修可能でしょうか？」

スピーカーが破損したような音が鳴り、私の視界が崩れる。右手が伸び、私の頭蓋の外装を剥がして何かを操作している。

回路と回路が接続せず、しかし接続していなかったメモリーの読み取れなかったどこかの個所が読み取れる。

それは一人の子供の姿だ。ひどく愛らしい姿。子供の名を呼ぶ母親の声。無邪気なほほ笑む子供の顔。

「——君はどうしたい」

気が付けば全く異なる場所にいた。暗がり、洋館のような場所には大量の人形が転がっている。いや、それは果たして人形か。外に外れ出ている大量のケーブルと長バネを、骨のような骨格のような基盤の中に組み込んでいる彼女。こちらを振り向いた彼女

の両目は真つ黒に染まっていた。その声は、涼し気な男性のようなものだった。

かちかちと、時計が回る音が頭の中で聞こえる。どす黒くそまったその時計の音が、私の意識を、正気を削り取る。ただその中でもあの少年の笑顔が頭から焼き付いて離れない。

どこか楽しげに微笑み、そして嘲笑いさえする相手に、私は目を閉じ、身を任せた。

* * *

母親が死んでから、深山琥太郎の生活は一変した。具体的に言うと、父親が突然オネエと化した。何が起こっているかさっぱりわけがわからなかったし、それは彼にとつては未だに訳が分からないことの一つである。

人生においてあきらめが肝心だと悟つたのは、忘れ難くも母の葬式が終わつた後、父親が買ってきたかつらをかぶって、母の口紅を塗り、エプロン姿で夕食の調理をしていた時だったか。父親の気が狂ってしまったかと思い、恐怖から深くは追求することができなかつた彼だが、ある意味でそれは正解だったかもしれない。オネエのようなふるま

いを父親がするのはどうも家の中だけで、外では今まで通り普通の父親といった感じなのだ。

この時点ではいまいちその謎の行動の理由がわからなかった琥太郎であったが、成長するにつれ、次第に察するものがあつた。

つまるところ、お母さん子だった琥太郎の、すつぽり欠けてしまった心の穴を、少しでも埋めるように。少しでも彼が寂しい思いをする間もなく、ただただ笑つて過ごせるように。そういう意図があつたのだろうということだ。

反抗期に突入した彼からすれば大きなお世話でもあつた。いろいろと迷走しまくつた上での結論であつた。だが、確かに幼少期の彼は、それこそ母親ともう会えないとなつて心がもぬけの殻になつてしまつていた彼からすれば、そういう諸条件をすべてぶつ飛ばすだけのインパクトがある行動だったし、寂しい思いをすることはなかった。

まあ、それが良いことか悪いことかは別にして。

改めて——深山琥太郎がその日、帰宅すると、ほどなく郵便物が届いた。海外から、発払いの送品である。

そして琥太郎は、宛名の文字の筆跡と、差出人の名前を見て二度驚愕した。

「さつき、みやま……。つて、え？　これ、お母さん？」

深山紗月。深山琥太郎の母親である。

色々警戒しつつ新聞紙を広げ、荷物の入った段ボール箱を置く。慣れた手つきでカッターナイフを取り出し、さばき、上蓋を開くと、中には手紙とトランクケースが一つ。大型のトランクケースは、子供くらいならやすやすと入ってしまいそうなサイズ感のそれだ。

おそろおそろという風に封筒を開封する琥太郎。そこにはやや劣化した質の紙に、ちゃんとした母親の筆跡で文章がつづられていた。

はろー、コタロー。

元気にしてる？

お父さんも元気にしてるかしら？

私はちよつと寂しいです。

まー、なんとたつて母国語が日本語の相手も少ないし？ 愛しの愛しの家族とこーして離れ離れになつちやつてますからねー。

単身赴任はつらいですよーつてやつかな。

とはいえど、私の関わつてる研究はまちがいなく今後何年もの先にわたつて、下手す

ると人類文明の存続にかかわるかもしれないプロジェクトなので、あまり気を抜けない毎日です。

詳細はちよつと話せませんが、とりあえず、お母さんはすげーことやつてるって思つていてください。

ターミネーターは宇宙恐竜の夢を見るか。

さて、そんな話はさておいて。

私は琥太郎が、一人寂しくしてないか、気が気じゃありません。

まだまだ5歳の育ちざかり、幼稚園の友達に「女みたいだ」といじめられては涙を流して私に抱き着き、しくしくと枕を濡らしている日々を忘れることができません。

そんな琥太郎が男らしく、元気に立ち向かっていけるように。

もつと言えば、寂しくないように。

サイココミュニケーターの第六感に従って、話し相手を送ります。

この子をお母さんだと思つて、大事にしてあげてください。

幼稚園の卒園式には大丈夫だけど、小学校の入学式は間に合うかちよつと怪しいので、今、——（※殴り込み、に斜線が引かれている）交渉中です。

お母さんの健闘を祈ってください。

それではまた、日が暮れてから昇るまで、いつも心に太陽を。

P. S.

ベータへ。えっちなことは、ちゃんと分別がついてからにしなさい？

『

「懐かしいなこの言い回し……。でも、これってたぶん、お母さん死ぬ直前に描いた手紙だね？　なんで今更……」

琥太郎の母親は、ちょうど手紙にあつた彼の卒園式の時点で亡くなっている。飛行機事故ではなく、研究所にハリケーンが突撃した影響だとか、色々聞いている。なのでその当時のことを思い出し、涙ぐむ琥太郎だったが、書かれている文面の追伸に違和感を感じた。

「ベータって、誰？」

彼の知り合いに、それに該当する名前の相手は当然いない。と、その視線は必然、トランクケースに向けられる。大きなケースには型番のようなものを示すシールが貼られており、そこにはこう書かれていた。

—— E M A — D O O β ——

「ベータって、これのこと？　いや、お母さんが何をしたいのかさっぱりわからないんだけど」

特に鍵が嚴重にロックされているということもなく、適当に外せば外れる形式だった。

それを開封すると、琥太郎は目を丸くした。

そこに入っていたのは、人形だった。エプロンドレス、ヘッドセットを搭載した、ゴシック調のハウスメイドスタイル。おかつぱにそろえられた黒髪は日本人形じみていたが、顔立ちはどこらかといえど西洋風。ただしこう、精工な人形にありがちな不気味さ、いわゆる不気味の谷といったものを発生させるようなこともなく、まるでそう、見た通り小さな女の子の死体でも詰められているかのような有様だった。

一目見て、嗚呼綺麗なお人形だな、と思った琥太郎だったが、その出来が精巧過ぎるのか、はたまた本当に女の子の死体なのかわからなくなり、思わず手を取り脈を計ろうとする。

「……冷たいっ。って、硬いなあ。ひよつとして、本当に人形——？」

ぱちりと、琥太郎と人形との目と目が合った。

突然開かれた人形の目に、琥太郎は再度驚愕した。が、飛び跳ねる間もなく、少女型の人形の両手が彼の肩に伸びて固定する。

「え？ 何これ、呪いの人形か何か?! お母さん、なんてもの送ってくるんだ！」

『———使用者を特定。設定確認、深山琥太郎。照合率、90パーセント確認。DNA

診断を開始します』

「琥太郎が何かを言う前に、少女は体を起こし、琥太郎の口の中に己の舌を入れた。いや、舌ではない。棒状の硬い突起物は、体温計のような形質である。しかし口内に突っ込まれたそれは別にして、外見上は幼女から深いキスをされているという見た目なので、あまりにも誤解を招きかねない状況である。また、もとをただせば眼前のこれは人形であり、どう考えても意味不明に違いない。」

混乱と絶叫を繰り返す琥太郎を解放すると、少女は『照合確認……、コンプリート』とつぶやいてから立ち上がった。

「はじめまして、であります。私はE M A—D O O。——貴方は狙われている、であります」

面食らったのも無理はない。

琥太郎が再起動するまで、しばらく時間がかかったという。

FILE. 02 謎のアンドロイド、EMALD

「ふむ、本日の日時は——、ケイオスはちゃんとやってくれたようであります。やってくれたようであります」

こきこきと首を鳴らすと、ぴよん、と彼女はトランクケースから降りた。そのまま家の扉を開けると、おもむろにその体から黒い霧状の何かが噴出する。そして空中に浮かび上がる様はいっそ不気味であり、琥太郎は得も言われぬ悪寒と、冷や汗が流れた。

『Maiden the Revolution』

霧というか、煙と言うか、ともかくそれらが猛烈な勢いで彼女の身体に巻き付き、なにがしかの形を形成していく。数秒経たずその場に現れたのは、メイド服に身を包んだ大人の女性だった。黒髪は腰まで届くほどに長く、しなやかな全身と女性らしさをこれ

でもかと強調するスタイル。細まった目は小さかった姿の頃の面影を残し、また耳元には共通のデバイスが取り付けられていた。

『EMA—D00。个体名、ベルテインβ、降臨であります』

何やらこう、恰好の良いポーズを琥太郎相手に決めるベータ。ちなみに彼女を開封してからここまで、軽く三分も経っていない。突然の超展開の応酬に、琥太郎は茫然としている。ぽかーん、という表情だ。

そんな彼に背を向け、「しばらくここで待っているであります」と言い残し、彼女は扉を開けて表に出た。

ばたん、と締められる扉。いまだ再起動が追いついていない琥太郎。

もつとも、その扉の向こうで「ドゴーン！」とでも言わんばかりの爆発音が鳴り響き、扉の隙間から黒いすす煙が入ってきたのを目の当たりにして、それどころではなくなつた。

「な、なに、なになの……？」

いまいち混乱から抜けきっていない琥太郎であったが、それでも慌てて扉を開いた。扉の向こう、通りの手前では、ベータを名乗った彼女と、もう一人が殴り、蹴り合っ

ていた。いや、服装含めてまるつきり2Pカラーである。違いは髪の色と、顔に仮面をつけていることか。ベネチアン風のマスクで顔面を覆い、口元は首から布で覆われている。翡翠色のうつろな瞳がわずかに光り、琥太郎の姿を射抜いた。

『
「ごせません、妹」
』

琥太郎に駆けだそうとする彼女に対し、ベータは飛び膝蹴り。続けて腕を構えなおし走り出すと、相手の目から光線（！）が放たれた。胴体に直撃、火花を散らしながら琥太郎の方まで投げ飛ばされるベータ。琥太郎の目の前で扉のへりにぶつかり、勢いが殺されて倒れる。

破壊された出入口。琥太郎の手を解いて立ち上がり、飛び蹴りをかまそうとするも、胸元のあたりでつかまれて振り回されるベータ。

それを横目に、琥太郎は声を上げながら自宅から逃げ出した。
地面にたたきつけられるベータ。と、敵の視線が琥太郎に向く。

「う、うあああああああああああー！」

腕を引きちぎられ、ベータの胴体は琥太郎の前方に投げ捨てられた。倒れるベータを前に、琥太郎の腰が抜けた。ばちばちと、右腕の付け根、間接から飛び出た金属の骨格

と思われる何かと、ばねとがきしみながら火花を散らす。

「だから、させないと言っています」

足を高々と掲げる、翡翠のメイド。そのまま猛烈な速度で足が振り下ろされるよりも前に、ベータは反対側の腕で琥太郎を抱え、家の屋根に飛び上がった（！）。落された足により、道路のコンクリートが砕かれる。と、そのまま翡翠のメイドは、首を百八十度近く回転させ（！）、その両目から再び光線を放った。

ベータはそれを避けながら、ときに背中や足で琥太郎をかばいながら逃げる。

「琥太郎様、しばらくここで待機を」

「いやいや、えっと、状況が意味わからないんだけど——」

「私は、あの愚昧を註してまいりますので」

ベータを追って屋根に飛んできた翡翠のメイド。それに対して、カウンターで後ろ回し蹴りを叩き込むベータ。瞬間的な動きに対応できなかったのか、翡翠のメイドはあらぬ民家の方向に飛んでいく。それを気にせず、ベータは後を追った。

『——ベルテイン・ケイオスシステム——』

鳴り響く電子音。と同時に、破損したペータの右腕のあるべき場所に、ふたたび黒い霧のような、煙のような何かが渦を巻き始める。そのままペータは胴体を振りかぶり、「右腕の拳を振り下ろすように」叩きつけた。

その動きに合わせ、一気に黒い何かは結束し、右腕の形を成した。殴り飛ばされた翡翠のメイドは、仮面にひびを入れて背後に吹き飛ばされる。

ペータは、形成が再完了した右腕と左腕とを構える。と、両腕に取り付けられるように、ロケットかミサイルかといったような装備が、再び黒い煙のようなそれによつて形成。そのまま腕を突き出して、ジェット噴射で体当たり——。民家の庭を荒らすだけ荒らし、その上で空中に投げ出された翡翠のメイド。と、その体が光り輝き、シルエツトがどんどん縮小されていく。

「仕留めましょう。その方が、貴女も本望でしょうか——つ、こつちも時間切れですか」

全身から黒い煙のような、霧のようなそれを吐き出し、ペータは元の少女サイズの姿に戻ってしまう。そして落下していた翡翠の小さいメイドも、まるで空間に0と1の電子的な羅列のエフェクトでも出現したかのような、そんな空間の裂け目に吸い込まれた。

「内部の本体には大穴をあけた、でありますから、修復はおそらく困難のはずであります。さて、それはともかくとして……」

ベータは、己と翡翠のメイドとの戦闘によって荒れ果てた、どここの誰のものともわからない民家の庭先を一度見やり。

「——うん、まあ、災害にあつたということにするであります」

あくまで自分の責任ではないと主張したいのだろうか。そんなことを言って、琥太郎の元へ向けて猛烈な高さジャンプし、ひとつとびした。

※

「それでは改めまして。私はEMA—D00。個体名はベルテインβ。お気軽に、ベータと呼ぶであります。ベータと呼ぶであります」

琥太郎にお茶を出してから、ベータは再度そう自己紹介して頭を下げた。

とりあえずお茶を一口含み、一息つく琥太郎。美味しい、という感想が表情に出たのか、「光荣であります。光荣であります」とベータが続ける。

未だ彼も面食らったままであるが、とりあえず疑問を出せるくらいには正気に戻ったのだろう。深呼吸をして、言葉を選び、整理して、まず一番最初の部分から確認をした。「えっと、そもそも何なの？ その、ベータさん」

「……………」

「ど、どうしたの、なんか両目が真っ赤に光ったんだけど!? あとピコーンとか、タイマーみたいな音が鳴ったんだけど!!?」

「すみません、ときめいてしまったのであります。ときめいてしまったのであります」
「今のどこにそんな要素があったの!?!」

「おっと、説明途中だったであります。途中だったであります。私はE M A—Dシリーズのプロトタイプであります」

「いーえむえー、でいー?」

「エレクトリカル・メイデン・オウトマタ・デストロイヤでE M A—Dであります」

「なんか最後のデストロイヤだけ、ひどく場違いな感じの単語だね……。えっと、電動侍女ロボット?」

「破壊系電動侍女型機械人形であります」

「デストロイヤだよ、破壊系って!? やっぱりそれだけ物騒!」

琥太郎の絶叫に「こればかりは色々あつて仕方ないのであります。仕方ないのであります」とベータは頭を左右に振った。

「名前の通り、EMA—Dシリーズはコタロー様の身の回りのお世話をするために開発された、スーパーアンドロイドであります。炊事洗濯家事荒事なんでもこなせるでありますよ? こなせるでありますよ?」

「えつと、お世話? えつと、それはいいかな。ちよつとだけ聞きたいことがあるんだ」
「何であります? 何であります?」

「お母さんの手紙を読むと、ずいぶん昔に送ろうとしていたみたいなのがしたんだけど……。なんで今、ベータさんが送られてきたのかつていうのがよくわかっていないかな? つていうのが」

「ふむふむ。当然の謎であります。当然の謎であります。まず、私の知っていることを言ってしまうと、本当はもつと前に、私なり妹なりが送られてくる前提になっていた、であります。しかしその前に、深山博士がなくなってしまったため、発送ができなくなりましたということでもあります。できなくなってしまったのであります」

「そう、なんだ……」

わずかに視線が落ち、緑茶の水面を見つめる琥太郎。

そんな琥太郎の様子に気づいていないのか、ベータは話を続けた。

「当初は、なよつとしていた小さな小さなコタワー様を一人前の男にするべく、色々頑張るといのがメインミッションだったであります」

「頑張るって?」

「まあ、色々であります。ケンカの修行をしたり、いじめつ子たちとの口喧嘩のトレーニングをしたり」

「意外と普通なんだね……」

「あと、エッチしたりであります。エッチしたりであります」

「なんか一気に話が飛んだね!」

「男というのは守るべき何かが出来れば、それまでの生きざまが一変するとプログラミングされているであります。されているであります。加えて女の魅力に魅せられ、男としての喜びを覚えれば、必然的に一皮むけるものであります」

それはさすがにちよつと美化されてる話なんじゃないかな、と、続けようとして琥太郎は気づいた。肉体面については、さきほどのように大きく変形(?)できるのであれば問題は無いのかもしれないが、そういうことではなくて。もつと重大と言うか、危険な事実について。

「……………えつと、つかぬことを聞くけど、ベータさん」

「何であります？ 何であります？」

「その、色々な修行とかしたりっていうのは、幼稚園時代の僕を基準にしてるんだよね」
「してるであります。してるであります」

「つまり、その、まさかと思うけど——」

「エッチも含むであります。含むでありますじゅるり」

「アウトー！」

ぺし、と、ちみつこベータの頭を引っ叩いた琥太郎だった。不満げなベータの顔に、軽く戦慄する高校生男子。そりゃ、確かに小さいころから現在にかけて見た目が女の子にしか見えないと、幼馴染にすらいじられる毎日ではる。だからといって、そんな、雄だの雌だの四の五の言ってんじやねえ！ と言わんばかりの、暴力的な手段を何故用意していたのか。先ほどまでとは別な意味で、琥太郎は混乱に叩き落された。

「何考えてるのさ、お母さん!? そんな条例違反な、年端もいかない幼児になんてこと覚えさせようとして—— あ、だから手紙に、ベータさんへの釘挿しが書いてあったのか！」

「ちっ」

「今、舌打ちした!?!」

「なんでもないであります。なんでもないであります。しかし深山博士からの命令制限

であれば、従わざるを得ないであります。諦めるであります」

「あ、あはははは……」

良かったのかどうかはともかく、文面の「分別がついてからなら良い」というあたりを伝えてしまうと色々ややこしいことになるだろうと、さすがに琥太郎も直感的に察した。よって、彼はこの話を続けることを中断した。

「で、えつと。当初はそれがメインだったって言ってたけど、じゃあ今はどうなってるの？」

「何か露骨に、話題をそらされた気がするであります。気がするであります」

「ぎくっ」

「話に進展はないと思うので、構わず進めるであります。現在のメインミッションは、コタロー様をお守りすることであります。お守りすることであります」

「僕を守る？」

「はい」

首を縦に振り、ペータは目を細めて続けた。

「——のつとられた私の姉妹たちから、コタロー様を守り、敵の首魁を粉砕すること。これが、今は亡き深山博士から受け継いだ、現在の私のメインミッションであります」

す
」

その言葉を受け、琥太郎の表情は少しだけ曇った。

FILE. 03 思い出のあみあみ

深山琥太郎の母、深山紗月が開発していた、電動侍女型機械人形が何者かにその制御を乗っ取られた！ 彼らの目的は、琥太郎の命。ベルテインβはたった一人、乗っ取られた姉妹機たちを止めるために奔走するのだ！

「というこもらしいんだけど、どうかな？」

「いや……」「どうかなって言われてもな……」

深山琥太郎の語った謎の解説に、彼の幼馴染二人、宮内理々と高原耕平は困惑の声を上げた。

彼らの通う高校にて、放課後の美術室。何か疲れた様子だった琥太郎を気にかけた二人が、それとなく事情を聴きだそうとした矢先、琥太郎はこの通りに事実を口にしたわけである。わけであるが、それに理解を示せるかどうかはまた別問題であるようだった。

「何、その、旧いアニメとかにありそうな設定は。そういうの知り合いの、スピーカーみたいな煩い子が色々詳しいけど、そういう作り話じゃなくて？ ころ太」

「えっと、一応、本当なんだけど……」

「まあ、その、色々意味が分かんない」

大体何よ電動侍女型機械人形って、という理々。おつしやる通りであるが、琥太郎としてもそれ以上の解説は不可能である。一方の耕平は「あー、でも確かに」と謎の納得を見せていた。

「琥太郎のお母さんなら、やりかねないかもなー。結構すげー学者さんだったらしいし」
「だったら、なんで今なのよ。というかさんな、すごいロボット作ってたならそれこそニュースとかになって、もつと世間一般に普及してない？」

「いやだって、琥太郎のお母さんだぜ？」

「……………まあ、それで一瞬納得しかけるのがアレよね」

実際、そんな母親であった。こと科学技術においては現代においてはぱつと見オバーテクノロジ、しかしその行動原理は家族にのみ集約されている。例えば琥太郎の父親が病気で死にかかった際、平然とクローン臓器培養器などを用意して移植などを行ったりしている。当人が、である。むろん無免許かつ公的な記録には一切残っていない事実であるが、そんなイリーガルであっても未だに人体に影響がみられないあたり、

もはや論じるだけナンセンスというレベルである。

ちなみにこれが、彼らが幼稚園の頃の出来事であるからして、色々とまあ、現実時は時にフィクションを凌駕しているのだった。

「うちの母さんの先輩？　の無涯おじさんとかも、神様がいるかとか科学的に立証してやるーとか息巻いてたし、世の中、結構不思議なことだらけだって」

「また変な人ね、その無涯さん」

「民俗学か何かの、大学の先生だったかな？　ちなみに数年前、どつかの遺跡を調査してるときに失踪したらしいけど」

「何があったの!?!」

さあ、と返す耕平の一言で、どこかの大学教授の話はいったん打ち切りである。ことは本題として、そのベータとやらの話に移る。

「でまあ、色々聞いたけどさ。やっぱり意味がわかんねえわ」

「わかんないって言われても……」

「とりあえずお茶で一息つくであります」

「あ、ありがとう……。うん、何これ。初めて飲む」

「ローズマリーであります。ローズマリーであります」

「へえ、私も初めて」

「悪い、俺紅茶ちよつと苦手で……」

三人の思考が一時停止して、数秒後。

その視線は、彼らに紅茶を配膳していた、90センチメートル大の少女のようなそれに集中する。ベータはそんな二人に向き直り、見事なカーテシーで頭を下げた。

「さきほどご紹介に上がりました、ベータであります。ベータであります」

「つて、本当にいた!!?」

幼馴染二名の驚愕の声に、琥太郎は「いつの間に……」と冷や汗をかいていた。

「あ、ちなみにもあります但现在、深山博士が提唱した『ぬらりひょうん理論』を応用した磁場フィールドを展開中であります。要するに気配を消しているのであります。我々三人と一台の会話は、周囲には全くもれる心配はないのであります」

「急展開すぎない、ベータさん」

「そうであります、急展開なのであります。気を緩めると、コタロー様はあつという間にぬっ殺されてしまうであります。ぬっ殺されてしまうであります」

「何なのかな、そのぬっ殺すつていうのは……」

琥太郎、困惑の表情。ぬらりひょうん理論つて何だよ、とかいう突っ込みはさせてもら

えないらしい。対して幼馴染二人は、彼女の動きに合わせてびよこびよこ動く両耳あたりのギアだったり、ときおり動いている胴体の中から聞こえる機械の駆動音のようなものに目を丸くしていた。

「なんでも聞くとよいのであります。よいのであります」

えへん、と胸を張るベータに、二人は恐る恐るといった様子で口を開いた。

「その、ベータだったっけ？ どうやって送られてきたんだっけ。さっきの琥太郎の話の中で、全然それがなかったから気になる。何年もたっていたんだろ？」

「修理してくれた相手がいたのであります。いたのであります。目的を同じにする相手だったからこそ、こちらの修理に快諾してもらったのであります」

「あ、その話だったら。伝票とかも、ひよつとして昔、琥太郎のお母さんが作ってたやつ？」

「そうであります。丸のまま流用したであります。研究機関自体はまだ残っているの
で、予算的には誤差の範囲であります。請求は向こう行きであります」

「後々問題なるんじゃない？」

「まあ、狐につままれたと思ってもらうであります」

「そういう話じゃないっていうか……。っていうか、え？ これ、この子、ロボ？ うそでしょ、本当は小学生の女の子でしょ？」

理々の発言に耕平も、ごもつともとばかりに首肯する。見た目において不気味の谷を越えている完全なアンドロイドは、その挙措においてほぼ人間と差がないといえるのだ。ゆえに二人から見て、完全にベータはちっちゃい女の子にしか見えぬ、琥太郎と並べると中のよさそうな姉妹……、姉妹？ まあ彼が女の子にしか見えぬ容姿をしていることもあって、姉妹にしか見えないのだった。

「いや、姉妹つてやめてよ。僕、男だから……」

なお、琥太郎本人は色々とそのことがコンプレックスというか、トラウマであったりした。

逆にこれには、ベータが驚いて琥太郎の方を振りむいた。胴体は理々たちの方を向いたまま首だけを回転させているので、160度以上は回っている。ぎりぎりびつくり人間でいけるかもしれない角度だが、平然と、首だけが猛烈なお勢いで回るその様は完全に呪いの市松人形とかのそれであった。実際、恐い。

「そうなのでありますか？ てつきり、コタロー様はこじらせてしまっているのではないかと危惧していたでありますが」

「こじらせて？」

「なにせ幼少期、おままごことをすれば父親役でもなく子供役でもなく、なぜか第二夫人なり愛人役をやらされていたと私の記録にはあるのであります」

「なんでそんなの残ってるの!」

「あ、これ琥太郎のお母さんがインプットしたんじゃないね?」

深山琥太郎、今でも十分女の子らしい容姿をした男子であるが、小さいころは完全に女の子にしか見えないくらい愛らしかった。そのせいもあっていじめに合い続け枕を濡らす毎日だったが、それでも仲が良かったのがこの二人である。そして何故かその三人で遊ぶと、琥太郎に割り振られていたのがベータの語った設定の通りであった。

実際、当時の琥太郎の一人称は「わたし」だったし、挙動も完全に女の子のそれだったので、まったくもって将来が心配になる(?)有様であった。母親も一応それを心配していたのか、ベータにインプットしたということはそういうことだろう。

だが、それは思わぬ形で解決するに至っていた。

「ほら、お父さんがその、お母さんがいなくなってから、お母さん替わりでもするみたい
に女装とかしたりして……」

ちなみにこの話は、幼馴染三人だけの秘密だ。

「それを見たときに、こう、僕も大人になったら、こうなるのかなって思って……。絵面的
にきついものがあるなって……。そしたらなんか、一気に色々、やるせなくなつて」
「なるほどであります。なるほどであります。深山博士が旦那様をお救いになつたの
は、ちゃんと意味ある行為だったであります。意味ある行為だったであります——

「その、目を赤く点滅させながら首を360度以上にぐるぐる回転させるのやめて！完全にホラーだから！」

琥太郎のツツコミ通りに酷い挙動をするベータ。彼をはじめ、三人ともがとても見られないとばかりに視線を逸らしていた。

「まあ、とりあえずこんな感じ」

「おっけー。ベータっていうこの子が人間じゃないってのはわかった」

「首……、首、が……、」

受け入れが意外と早かった理々と、サイレンか何かのごとく回転する彼女の生首という現実を受け入れがたいらしい耕平。余計な混乱を招きすぎのベータである。なんとかしてよ、という琥太郎の視線に、ベータは一度咳払いをして。

「ちなみにですが、昨日夕方あたりで軽くシメた妹の方が、本来はもっと淑やかであります。淑やかであります」

「何の意味もないよね、その情報を今言われても!?!」

「私はプロトタイプゆえ、深山博士の趣味が最も現れ出ると考えていただければ」

「どんな趣味!」

「それは、嫌であります、コタロー様。聞くだけ野暮天つてものでありますよお」

「なんでそんな、えっちなことを尋ねた小さい子を諭すような言い回しをとってるんだろうねえベータさん……!」

頭を抱える琥太郎に、理々が肩をぽんと叩いて一言。

「これ、アレだわ。話してて疲れるこの感じ、確かにおぼさんの趣味がすごい出てるって思うわ」

「趣味っていうか、それってもう性格っていうんじゃない……」

「理々様。ここで博士より録音メッセージが」

「えっ?」

璃々の方を見ながら自分の延髄あたりを叩き、それはもう、魔法少女にでも変身するのだろうかという、きらつとしたポーズをとりながら。

『——深山紗月、永遠の十代です♡』

「ないわー。おぼさん、年齢考えようって……」

わざわざベータに録音されているその音声と、動作のプログラム。および彼女の実年齢、プライスレス。

※

「で、そもそもなんでベータさんってば、こっちに来たの？」

「当然、護衛であります。護衛であります。ちよちよいとディアナ様にライド・オンしてきましたであります」

「ディアナ様……？」

しばらくして。顧問の女教師がいないことを良いことに、美術室に居座り続けるベータであった。

琥太郎達が各々、果物のデッサンに励む最中、ベータはどこからともなく取り出した編み物セットで、しゃこしゃこや何やら作っている。玉突き二本針は手慣れたように輪を作り穴に毛糸を通しているのだが、しかしなぜかうまくいっていない。不器用というわけではないが、何ともいえない、慣れてない手つきだ。琥太郎が不思議そうに見ているのと同様、ベータ本人も不思議そうにしながら、それを編んでいる。

「ベータさん、炊事洗濯家事荒事、なんでもいけるっていつてたけど、編み物苦手なの？」

「苦手なはずはないであります。一度、試用試験のときは問題なく突破していたであります。はて……？」

ともあれ答えがでなさそうなことということで、琥太郎は会話を中断してデッサンに戻った。

各々がそれぞれ、適当な題材をデッサンしている。例えば耕平は、なぜかイチモツの個所がえぐり取られた哀れなダビデの石膏を。理々はオーソドックスにリンゴの模型を。

そして琥太郎は——理々を。

「んー、うん」

普段、落ち着きがないのか理々は中々、2秒以上同じような姿勢を維持することができないでいる。だがこうして集中させている場合はその限りではない。

なので、こうして珍しいこともあるものだ、その希少性から筆を執った琥太郎であった。

「……昔、デ○モンでこんなの居たな」

「魔法陣？」

「ひどいや二人とも」

完成した絵があまりにアバンギャルドすぎて、当初の意図通りにはとらえてもらえな

かった。

まあ端的に言つて、球形の何かが十個か十二個か折り重なり、なおかつ一つ一つに目の口だののパーツがばらばらに分散されていたりするのだから、どうしようもないと言えはどうしようもない。琥太郎本人の感覚としては普通に描いているだけなのだが、これはもはやセンスがないとかそういう次元ではなく、ある種の才能であろう。

「コタロー様は、真理の一端に通じてるでありますか……?」

「ちよつと、何を言つてるかわからないけど、褒められてないのは確かだよな? もう、知らないもん」

ぷい、と顔を背けていじける琥太郎。制服は男子のものだが、挙措、雰囲気、声音、何から何をどうとつても女子のそれであった。なぐさめるよりも頭痛が先行する理々と、苦笑いを浮かべる耕平。

一方、ベータはといえば。

『あんまりくよくよしてると、そのうち、——（※自主規制）とれちやうぞで!』

「なんでそんな音声、録音してるかな!? お母さん!」

慰める意図があるのかないのか、今は亡き母親のトンデモ台詞が琥太郎の背を撃つた。同様と言うか混乱というか羞恥というか、もうなんというか色々という意味不明な心理

状態の琥太郎であった。

ただ、そんな琥太郎の首に、ベータは先ほど編んでいたマフラーをかける。……いや、マフラーと言うにはものの太さが均一でなく、ところどころの穴の大きさも不均一でバランスが悪い。明らかに素人が作ったとしか思えないような出来のそれであるが、ベータは気にせず琥太郎の首に引っかけ、巻いた。

「まあ気にしないことであります。深山博士も、昔は色々気にしていたようであります
が、そういうのを抜きにしたときに初めて限界突破したようであります」

「別に僕、何か限界を超えようとか言うつもりはないんだけど……」

「とりあえず、私に対するツツコミ限界値は超えてもらわないと、これから色々大変であります」

「それ、僕が超えるメリットほとんどないよね!？」

琥太郎のツツコミもそこそこに、ベータは部屋のロッカーに隠れた。何かとおもえば、出入口が開き、顧問の佐倉先生が入ってきた。琥太郎たちの絵を見て寸評をはじめ
る最中。

「そういえばお母さんもマフラー作ってくれたっけ。……へたっぴだったけど」

ふと琥太郎は、首に巻かれたマフラーにデジャビュを感じた。

FILE. 04 面影を数えて

「ベルテインβであります。よろしくお願いいたします、であります。であります——
——良治さ、ま」

「これはご丁寧に。深山良治です、よろしく、ベータさん」
「……………いや、お父さん、受け入れるの早すぎないかな？」

父が数日ぶりに帰宅してから、ベータとのやりとりである。玄関先で慣れた風に頭を下げ、父親もとくに違和感なく彼女を受け入れている様子に、思わず琥太郎のツッコミが入る。もつとも父親は苦笑いを浮かべて、琥太郎の頭を撫でるのだが。

「本人から事前に電話連絡があつたからね」

「えっ、いつの間に…………」

「コタロー様と会つた翌日であります」

「それにね、紗月さんの作つたロボットだよ？　この子。ちよつとくらいの不条理は、

まあそんなものかって感じだね」

「え、ロボットだつて知ってるの?」

「知ってるというか、図面引いてたのを昔、見た覚えがあるというか」

「は、はあ……」

妙に理解が早いと思つたら、そういう事情か。というか、図面引いて作つていたのを見ていたということから、ますますこのアンドロイドを作り上げた母親のすさまじさがかがえるような、伺えないような。

とはいえど、それで納得してしまう父親に、いまいち納得がいかない琥太郎である。あるのだが、父親は特になんら違和感を持たず、一軒家の倉庫に「えつと、琥太郎が小さかった頃に使つてた台は……」と何やら探しに行つてしまった。

「はい、これの上に乗つたら料理とかしやすくないかな」

「!・ 感謝するであります、感謝するであります」

そのまま二人してキッチンに消えていく。どうでもいいことだが、琥太郎が思春期に入る前後で父親は女装癖を止めているが、食事は基本的に父親が作っている深山家だ。もつとも昨日はベータが作ったのだが、それに引き続き琥太郎は少し嫌な予感がしていた。

キッチンを覗くと、案の定、ベータがとある食材を取り出した。

「まずはレンコンであります。続けてレンコン、トドメにレンコンであります」
「やっぱり!?! レンコン以外ないの!」

「レンコンは万能なのであります。健康、美容に良いのであります。つまり良いのであります、良いのであります」

まないた、レンコンを見事にカットし、ピラミッド状に組み上げるベータ。おいおいおい、と声を上げる琥太郎をスルーして調理がすすむ。もつとも琥太郎も最初に声を上げたくらいで、その後については何も言わず待機していた。あくまで作ってもらっている立場というのはわきまえているらしい。

果たして完成品は!

「ビーフシチューであります」

「レンコンの原型がない!?!」

言葉の通り、とろとろのビーフシチューである。1時間も経過していないあたりからしてレトルトプラスチックアリアか。眼前に並べられた皿の異様なドロドロ具合からして、いわゆるベジタブルポターージュとかの類なのかもしれない。実際、父親が「すり下ろしていたからね」と笑っていた。

「二人は食べるであります、食べるであります。私はまだ作るものがあります、あるであります」

「あはは、じゃあ、とりあえずすすめられとこうかな？ ほら、琥太郎も」

「あ、はい……」

言われるがまま着席し、いただきますと手を合わせる。スプーンで一口すくったシチューは、独特な舌触りや喉ごしこそあれど、基本的にはデミグラスソースをベースとしたビーフシチューだ。ただ市販品にありがちな、たんぱくさというか、味の密度の軽さと言うか、そういうたものはない。時折感じるつぶつぶの触感と、そこにほんのり香る野菜の風味、そしてほんのわずかにごろごろとするじゃがいものようなその触感が面白い。初めて食べる味だが、琥太郎はどこかそれになつかしさのようなものを覚えた。

「なんか、ほくほくいつてる。じゃがいも？」

「ん、これ、レンコンだね」

「！」

驚く琥太郎に「調理法次第で触感は千差万別であります」とベータの声がキッチンからする。

「とりあえず揚げてきたきたであります。お肉と味噌をサンドしてであります」

出されたレンコンのフライも、じゃきじゃき言う中にもなんともいえない粘り気、そして染み出す独特の甘みのようなものに、琥太郎はきよんとする。こんなにレンコ

ンって美味しかったつけ、というのと同時に、ふたたびベータがキッチンに戻った様を見て「あれー？」という疑問符が湧いた。

「まだまだ作り足りないであります。もっと作るであります」

「そんなに食べられないから、止めて！　というか昨日の煮物も残ってるじゃん！」

「お、そうでありました」

なお当然のように、その煮物にもレンコンが使われている。

ともあれレンコン尽くしな夕食を終え、いまだ慣れない様子のままではあるが、琥太郎は早々にシャワーを浴び、宿題を済ませ、就寝。今どき普通の高校生には非常に珍しく、毎日九時間以上の睡眠を確保している少年である。

一方の父親は、翌日有給につき夜更かし中。買ってきた競馬新聞を広げて、涼し氣に予想を立てつつ、ワイドショーを眺めている。ベータはベータで居間の掃除をしており、二人は同じ空間にいる。どこかベータがいるということに、不自然なほどに慣れたような、そんな空気がある中で。

「——紗月さん、レンコン大好きだったからね。気を抜くと毎食、レンコンばかり出てたつけ」

唐突にそう切り出す良治に、ベータは首を上げて、180度回転させて後ろの彼を見た。なお、向きながらも身体は掃除を続けているため、たいそう酷い絵面である。

「栄養的に悪いからってやめさせようとすると、じゃあアンタが作ってよってせがまれて。それで、なんだかんだ少しは覚えたんだよね」

「さようでありますか」

「覚えはしたけど、結局、琥太郎には泣かれてばっかりだったかな。……どんなに外見を取り繕うとしても、根っこのあるところにある寂しさだけは、克服できるものではなかった」

「さようでありますか」

「夕食の時にね、ああいう風に琥太郎が表情をコロコロ変えるのは、久々に見たんだ。だから、それが嬉しくて、同時に少し寂しくもあつた。……あ、アルコールそこじゃないからね」

「えっそうなの……？　でありますか？」

「もつと奥にやらないと、あんまり中に入らないから」

「承知したであります」

「相変わらずテトリスは苦手かな？」

新聞を畳み机の上に置き、良治はベータの顔を見る。一方のベータも掃除を中断し、立ち上がり、浮かび上がった。そのまま良治の手前まできて、視線の高さが揃う。

「何を言いたいでありますか？」

「いや？ 紗月さんは本当、よく、色々なことを君にプログラミングしてゐるなって思つてね。くせとか、趣向とか。こう、何から何まで紗月さんのことをそっくりそのまま思ひ出すなつて。まあ、紗月さんはこんな家事はしなかつたし、丁寧な口調でもなかつたけど」

「そういうものであります。あくまで深山博士の趣味であります」

「うん。つまり、紗月さんの考えそうなことは、君に解るつてことだろうね。だったら、君に聞けそうだ」

何を、というベータの言葉をさえぎるように、彼はそのまま続けた。

「——紗月さんは、最期、僕らを恨んでいたかい？」

一見して意味不明なそのセリフに、ベータは少し押し黙り。逡巡し、しかし微笑んで、明確に解答した。

※

「……………何これ？」

翌朝、琥太郎が起床すると自分の枕元に何か居た。いや、何かと形容するのも微妙なところであるが、外見上は少女のような、人形のような、つまりベータとデザインのベクトルを同じにする何かである。ただ顔立ちなどはいくぶん勝気であり、髪型がツインテールだったり、髪の色が金髪（というには蛍光色のそれだが）だったりと差異は大きいのだが。

窓が少し開いているあたりからして、そういえば昨晚閉め忘れたかなと思ひ直す琥太郎。どうもそこから侵入したのだろうか。

………とはいえど、琥太郎が覚醒するまで全く騒ぐ気配がなかったこの相手が相手なのだが。

「勝負するんだぜ！ 勝負するんだぜ！」

ただ、発言が完全に意味不明である。困惑すること必須な琥太郎だったが、さもありなん。

「——アタック、であります」

「——ぐえーぜっ!？」

と、扉が猛烈な勢いで開かれるとジェットのごとく猛烈な勢いでベータがエントリー！ 弾丸のごとき彼女の頭突きを食らい、金髪ツインテールアンドロイドは部屋中を、ギャグマンガみたいに跳ねまわった。いちいち機械音と「ぼむん」とでも形容すべき独

特なサウンドとが入り混じったような音を鳴らして跳ねまわり、やがて琥太郎たちの目の前にぼてんと落ちた。

「ぐっ、この圧倒的な頭突き、流石お姉さまなのぜ！　しかし負けるわけにはいかないのぜ！　いかないのぜ！」

「どうでもいいであります、どうやって侵入してきましたでありますか——ルナーサ」
ルナーサと呼ばれた彼女は、ぼつと三点着地の体勢にわざわざポーズングしなおしたうえで立ち上がった。

「我が名はルナーサだぜ！　深山コタローどの、お命かけて勝負なのぜ！」

「ごめんね、えっと、いきなり全く意味がわからない」

頭を抱える琥太郎に、ベータはこっそり小声で話しかける。

「チャンスであります。ルナーサから情報をバンバン引き出すであります」

「ひきだす？」

「ルナーサは、端的に言えばアホの子であります」

「アホの子言っちゃったよ!?　それでいいのかアンドロイド！」

「まあ、コタロー様の好みがわからなかったから、どんな女の子が好きでも対応できるように色々設計してあります」

空恐ろしいことを言われた琥太郎である。何か、つまりその、今後登場する姉妹機に

ついでには色々なタイプの女の子として設計されているということか。そういえばあの2Pカラーのような翡翠の機体は妙に無口だった。ますます頭が重くなる琥太郎だったが、気を取り直して。

「ルナーサちゃん、ごはん食べない？」

「わーい！ おあいそになるのぜ、再起動してからももうずっと何も食べてなくて……つて、私たち電気で動くんだった！ 食事は嗜好品なんだった！ もうだまされなさい！」

「うん、すごくアレな子だね……」

「だぜ!？」

ベータとは別ベクトルで頭の痛い子のようにだった。というか、そもそもこれがアホの子というイメージで作成されたのだとしたら、設計者の母親は間違いなくアホの子というのを間違えて認識してるに違いない。こういうのはポンコツとか、そういうのであった。

「というか別に誰もだましていないのであります」

「だぜ!？ そ、そうか、ごめんなのぜ」

そして謝り始めるこの有様が、もうすでに意味不明を極めていた。

「とりあえず制服に着替えるから、外出てくれない？」

「了解なのぜ！」

そして、すごく聞き分けの良い子らしい。

ともあれ制服を着用した琥太郎、およびちゃんと扉の手前で待っていたルナーサは、ベータに促されるまま居間に。父親が「おや、お客さんかな？」と微笑む傍ら、昨日残りのビーフシチューの残りとトーストで食事。食べ終わり色々と準備を終え「行つてきまーす」と琥太郎が手を振る。

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃいませであります」

「行ってらっしゃいなものぜ——」って、違う！　なんで私、一緒になって食事の後片付けとか見送りとかやってるのぜ！」

やはりA Iが色々とアレらしいルナーサであった。完全にベータたちのペースに流されていた。

急いでベータの手を引つ張つて、琥太郎に追いつき「勝負するするんだぜ！」と思ひ出したかのように連呼を始めた。

「えっと、勝負つて何をするの？」

「料理で、チーム戦なのぜ！」

「コタロー様はお時間がないので、手短かに話すであります」

「お料理対決なのぜー！」

やっぱりさっぱり意味が分からない二人に、得意げに腕を組んで、むふん、と鼻を鳴らすルナーサ。

「テレビ中継があるのぜ」

「テレビ？」

「今度の土曜日、北海道に来るのぜ！　そこにエントリーしてきたから、料理対決なのぜ！　こっちはこっちでもう一人助っ人を呼んでるから、楽しみにしておくのぜ、お姉さま、琥太郎様！」

ぜーっぜっぜっぜ、という、非常に特徴的な笑いをしながら、どこかへ飛び去るルナーサ。

琥太郎、足元のベータに視線を合わせて「どうする？」と反笑いで相談した。

「？　コタロー様、ひよつとして勝負を受けるつもりであります？　いつそ実力行使に出てしまった方が、色々と決着が楽だと思っております。そもそも命がかかってるでありますよ？」

「いや、そうかもしれないけど……、なんかこう……、断るのも可哀そうで……」

「嗚呼……」

両手で顔を覆い、ベータも琥太郎も、何とも言えずうなだれた。

FILE. 05 激闘!D—1グランプリ!! ゲストも
いるよ!

『さあ、やってまいりました北海道一のカレーを決めるグランプリ?—1グランプリ!

誰が呼んだかD—1グランプリ! 今回も2日間にわたり、手に汗握る熱く激しいバトルが幕を開けるんや! 出場資格はなんでもあり、プロも家庭もなんのその!』

『ちなみに去年は青森開催だったでヤンス』

『こらっ! いらんこと言うなっ! ってか何やその語尾、意味不明や! もっと流暢にしやべらな流暢に』

『じゃ、普通にしやべらせていただきやっす(笑)。どうも玩——』

全国ネットで配信されることもあつてか、結構有名なお笑い芸人を司会に招いてのイベントである。カメラも複数台回っており、スタッフが各所でカンペを出し「ここ、笑いどころ!」「笑い声お願いします」などなど、ジェスチャーもまじえながらオーディエ

ンスに指示を出していた。決して生放送というわけではないが、琥太郎もそれに苦笑いを浮かべながら、リアクションをとっていた。

D―Iグランプリ。ちよつと名前を変えるとお笑い芸人のグランプリとか、総合格闘技とかと被つてしまいそうな感じのそれだが、ともかくその番組収録があるということをはがきが送られてきたことで知った。見れば参加者はベータで登録されており、つまりこれは、ルナーサというらしいあのアンドロイドが「だぜだぜ」言いながら準備してくれたものだということか。命を狙う刺客として送り込まれてきてる割に、やつてることがちんぷんかんぷんなのは、決して誤解などではないだろう。実際、ルナーサのA Iはポンコツと言つて差し支えはないのかもしれない。

ちなみにこのイベントについては、視界の漫才師たちが言つていた通り昨年は青森で開催されており、そのときはO―Iグランプリとかいつていた。特にどの県で開催するという決まりはないらしい。

ともかく琥太郎は、ベータのアシスタントとして隣に立っていた。

「人、結構来てるね。さすがにテレビのイベントだからか」

「まだ春先なのに、よくやります」

ちなみにベータは、既に大人サイズとなつている。エプロン姿の琥太郎の横で、クールな様子で周囲を見回していた。集客人数は近隣の人に加えて観光客、芸能人やアイドル

ル、どうも学校帰りにでも寄ったと思われる高校生などなど。家族連れの出場者などがいたりもして、「がんばるぞ!」と声を荒げる小さい子がほほえましいと言えばほほえましい。

『さて、ではプログラムを説明するで! えー、?—は、まず予選として、今日の午前中に各々カレー系の料理を作成してもらい、その集客数を競ってもらいます! また、予選通過者で本日夕方から明日の午前中にかけて決勝のカレーを準備してもらい、当日にお出ししてもらいます!』

『予選においては、一晩寝かしたりといった一手間を認めないってことですな』

『素人もプロもなんでもありですが、味の傾向が完全に似通ってしまうからだそうです。また、材料については事前にスタッフが持ち込みに関してはチェックをつけておりますので、その辺りはご安心を!』

さあ! 道民による道民のための、カレー大会! 開幕や——いっ!』

わーわーと湧く会場。オータム特設会場に張られたテントブース複数のうちの一つに、琥太郎たちはいた。おっかなびづくり包丁を持つ琥太郎と、その手から包丁をさつと取り上げて「とりあえずまず、野菜を洗うであります」と指摘するベータ。

「ころ太、来たわよー!」

「お、意外と本格的なブースだなこれ」

土曜日早朝というに、当然のように顔を出す幼馴染二人。理々はジャージ姿、耕平はあくび一つ。存外付き合いが良い二人であるが、休日の過ごし方に明らかに差が出た。

あつ、と気づいて手を振る琥太郎と、会釈するベータ。二人はそろって、大人サイズになったベータに「誰これ？」という顔を向けていた。

「ベータです。本日はテレビカメラに映るとあつて、人間大のサイズになってます」

「お、おお……、すっげー美人だわこれ……」

「本当にベル助!? くっ、おつきいわね……っ!」

「りりさん、何その般若みたいな顔?」

琥太郎の指摘に「なんでもないわよっ!」と、ぷいっと顔を背ける理々。なお、ベータ本人はその視線誘導をロボットらしくセンサーとかで明確に感知しているので、首肯一つとともに、一言。

「大丈夫、女子高生なら将来性はあります」

「……なんで慰められてるのよ、アンタに」

『ほら、赤ちゃんできたら嫌でも大きくなるから、ね?』

「本末転倒じゃないそれってば! っていうか、ころ太のお母さんの声のライブラリが多すぎない!」

得意げになることもなく頷くベータ。そのバストは豊満である。己の実際平坦なそれと見比べ、忸怩たる思いを抱く理々であった。

「で、何を作るの? ベータさん」

「オーソドックスに、ドライカレーにしようかと考えています。どうせ皆さま、色々なところをめぐっていらつしやるでしょうから、軽くつまめて、インパクトに残りそうな感じにできればと」

「へえ。どういう感じ?」

「まずレンコンを取り出します」

「うん、知ってた」

ともあれ完成図としては、野菜のちりばめられたドライカレーにするイメージであるらしい。ごぼう、にんじん、枝豆にレンコンと、ひき肉に合わせる具材にしては煮込みものとかきんぴらに使いそうな代物だが、ベータいわく「カレーの包容力は並大抵じゃない」とのことであった。

「本当は油通しした方が触感が楽しいかと思いますが、今回はやめます。事前に全体の準備の傾向からして、欧風ならびにスープカレーが多いと判断しました。どれも煮込みだり細かくしたり、カレーを全面に押し出しているかということで、逆にこちらは野菜で攻めようかと思えます」

「なるほどね。他と違うってことで、一点突破しようってことか」

「時たま、本当、プロでもないのにとんでもないものを作る人もいたりして、中々困惑したりもしますが……」

「ちらり、と近くのブースに視線を送るベータ。つられて琥太郎もそつちを見ると。

「八坂くん、何それ、ハンバーグ？」

「別に、大した話じゃないぞ？　今回はあんまり煮込んだりする時間がとれないから。オブラート入れたりとか色々手を変え品を変えはできるけど、ブイヨンとスパイスの強さばかりはどうしようもないから、変わり種で攻めるっただけだ」

「おぶら……？　いや、それにしても、なんで包丁と、あと氷水？」

「肉は熱が勝負だ。家庭で作る分には素手とかでこてこてにしてもいいんだけど、今回合わせるカレーは香りが強めだから、逆に肉のパワーを強くしようかって思った。あらびきで、あんまり油が溶け出さない程度に調整してる」

「へえー、すごい……。って、カレーも何これ？　野菜ジュース？　にしては色がグロいっていうか……」

「グロい言うなつ。牛乳とかワインとか、色々バランスをとって混ぜてるだけだ。単純なベースに水を持つてくるより、味に深みが出る」

「へえー」

「スパイスの方も、市販のパウダーベースから作るから、結構手間なんだよなこれ……」
「いや、面倒がつてるところ悪いけど、私、女子として自分の料理技能に疑問を持つちゃうくらいだからね? 八坂くん。何平然とワインの栓抜いたりとか、味調整したりとかしてるのさ……。なんでそんな本気なの?」

「決勝まで進むと商品券もらえるからな。それで、この間通販でやってた包丁セットを買おう」

「所帯じみてるね!?!」

ポニーテールの妙に声が妙に響いて煩い女の子と、友達なのか面倒くさげな表情のままさも平然とプロ級? の調理をする男の子である。

「いや、あれはちよつと本格的すぎない? ベータさん」

「しかもあのハンバーグ、間違いなく美味しいです」

「それは、なんとなくわかる」

「カレー単品でなく、カレーとハンバーグとライスとで普通に美味しい逸品に仕上げるといったところでしょうか。ただ味は确实であります、調理時間がネックとなるので、こちらは現状の作戦のまま続けます」

と、理々が「あれ、タマ公?」と声の響く少女の方に走っていく。どうやら知り合いらしい。そして妙に手慣れた料理男子が、琥太郎たちの方に一度頭を下げた。どうも、

彼女の質問責めから解放されたことに感謝してる様子だった。苦笑いしながら手を振る琥太郎と、特に気にせず調理をすすめるベータであった。

「——ぜーっぜっぜっぜ！ 今日こそ覚悟してもらうぜ、お姉様！ 琥太郎様！」

と、そんなところに平然とこのセリフを投げ掛けてくるのは、予想するまでもなくルナーサであった。ただしベータ共々、こちらも大人サイズになっている。そしてその胸元を確認して自分のそれを見て、理々は再び「くっ、やるわねー」みたいな顔になった。実際、大人ルナーサのバストも豊満であった。大人ベータのバストも豊満である。

「こちらにかかずに調理してる？ 大丈夫、ルナーサ」

「あ、それは問題ないって。今、アシスタントに野菜切ってもらってる」

「あれ、ルナーサさん、アシスタントってそうやって使うものなの？」

「だって琥太郎様、さつき私、指、ちよつと切ったし……」

実際、大人ルナーサの右手人差し指には絆創膏が巻かれていた。アンドロイドが指切るって何だよって話でもあるし、切ったところに絆創膏を巻いたところでどうだという話でもある。なにより侍女型アンドロイドが料理下手って色々どうなのよ、というツッコミが、琥太郎や理々ら三人の脳内に駆け巡った。

FILE. 06 D—1勝負（決着済）！ 駆けよコタ
ロ—疾風の如く！

「うう、こんなの納得いかねえ！ まるで私、こんな、こんなオチ——ギャグキャラ
みたいだぜ、こんなの!!!」

十分ギャグキャラみたいですよ、と琥太郎の生暖かい視線がルナーサに突き刺さる。
翌日、決勝の日。六名での投票戦において、ベータの隣にルナーサの姿はそこにはない。
ギャラリーの中に混じって絶叫するルナーサであるが、隣の琥太郎と理々は特に何も言
わず、何と言えないほほ笑みを浮かべていた。実際のところ彼女本人が「勝負に負けた
以上は、新しい勝負を挑まない限り何もしないっての!」と、涙目で言った通りなので
ある。ほんこつなルナーサであるが、根が恐ろしく素直なのは重々承知した琥太郎であ
るからして、周囲の扱いもそれに感化される形になった。

『き、決まったー！ 優勝は支倉志津香さんの「ゼロ・カレー」!』

『ペースト状に完全に調和されて味の志向性がないのに、どこか懐かしいおふくろの味がするでヤンス』

『つてオマエ、また口調、アホみたいなのとるでつ』

『惜しくも敗れた八坂真尋さんの「目覚めのホワイトカレー」と、見た目はともかく方向性は近かったでヤンス。けど、ここに来てやはり年季の違いが——』

『やめんか、女性に向かつてんな話っ！』

インタビュアーに答える前に、例の妙に料理上手だった、そして今なぜか包丁セットの箱を片手に満足げな高校生の少年に、異様に若く見える主婦の女性（優勝者）が駆け寄る。

「司会さんが、年季、つて言っていたけど、たぶん違うわよねえ。味だけでいったら、君の方が数段細かったし」

「何の話です？」

「私は、君の味付けは結構好きだつて、ただそれだけだわあ。——何か足かせじやないけど、まるで神様みたいな遥か高みでも見てるみたいなの、そんな顔してるから。それに届かないことに、くさつて、居直つてるみたいに見えるから」

「えつと……、すみません、今いち要領を得ないというか」

「でもね。そんな、なんでもできるみたいなの、なんでも知ってるみたいなの、ものすごい高

いところを目指したらいけないわよ？ きつとそれは、君を不幸にするわ。なんとなく、おばさんはそれが心配。おばさんも子供いるから解っちゃうのよ、なんとなく」

じゃあね、と手を振りテレビカメラの前に小走り駆け寄る女性。なんだか別作品の、何か重要な伏線が張られたような気がしないでもないやりとりを踏まえたうえで、ともあれ試合は決着。最終的にベスト4という微妙な立ち位置におさまったベータは、琥太郎に「商品券であります」と献上してきた。

「やはりあの少年、高校生ってレベルではありませんでした。第2位だったのは奇跡に近いかもしれません」

既にベータの眼中にルナーサは入っていないようであった。姉妹機、涙目である。商品券を受け取りながら、琥太郎も困ったように笑った。

「う……、う……っ！」

「ベータさん、ほら、いじめちゃだめだよ……。姉妹なんですよ？」

「自爆して自分で調理できず壊滅的な結果になった妹については知ったことではありません。……、（大体、そこまでぼんこつには設計してないわよ、流石に）」

ぼそぼそと呟かれた何事か聞こえなかつた部分について、琥太郎はやや頭を傾げる。

「大体、設計思想的にルナーサ。貴女は包丁使うのは得意のはずでしょう？ 何故その得意の包丁で手を切ってるんですか。余所見でもしたんですか？」

「そ、それは……っ」

ちらり、と琥太郎の顔を見て、赤くなるルナーサ。一体何？ 全く意味が分からないとばかりに、さらに不思議そうな琥太郎のきよとんとした顔。一方、ベータは何事か察したのか、見たこともないくらい鋭い目で、顔を持ち上げた。完全に見下した表情である。

「そういう事情でしたか。……まあそれなら設計思想として間違っではないです」
「？」

「つまり琥太郎様——殺すとは言っていますが、ルナーサも琥太郎様が大好きなのです。だから、大好きな琥太郎様を見かけて、見惚れたのでしよう」

「ちよ、お姉様っ!？」

げげっ、とばかりに妙ちきりんなポーズをして後退するルナーサと、やはりあんぐりとおどろいた表情の琥太郎である。というか、今ルナーサ「も」とか言わなかったか。

「だ、だって、でも、そんなこといったって、私は琥太郎様を殺すために来たんだぜ!？」
何、馬鹿なことを言ってるんだお姉様!？」

「簡単な話です。そもそも深山博士は、我々を『そういう目的』のために設計したのだから、つまり『そういう機能』をもっているわけで、つまり『そういう好み』をしてるということです」

「……な、なるほど。色々濁しすぎて細かくはわかんないけど。君たち姉妹は、みんな僕が好きなんだね。………なんだかすごく、自意識過剰なセリフみたいで、なんかいやだなあ」

「う、う、うあああああああああああああああああああああああああつ!」

顔を真っ赤にして、そのまま走り去る大人ルナーサ。それこそ猛烈な速度でその場から消えてしまい、既に琥太郎たちは人込みで見失ってしまった。

「……、ころ太、『そういう機能』って何?」

「え? あ、いや、あはは………」

「何、誤魔化しもせず逃げようとしててんのよ!」

「待ってください、追いかけるつもりですか?」

「え、あ、うん。一応、そうだけど……」

「ルナーサ本人は手出しをしません、後追いで誰か来てるかもしれませんが、私と一緒に探しましょう」

首肯し、足早にその場を離れる二人だったが、しかし丁度行き当たりで道が二つに割れていた。どちらかの方角からルナーサ、羞恥の絶叫が聞こえては来ているが、判然とはしない。

「くつ、飛行ユニットさえ故障していなければ……!」

「飛べたんだ、ベータさん……」「なんでもありねベル助」

「本来ならばです。現在はどうにも修理が難しく——それはそうと、二手に分かれましょう。何かあつたらすぐさま連絡してくださいであります」

道を左右に分かれる琥太郎とベータ。

音のする方を探していると、しばらくして、琥太郎たちは。

「ぜっ！ ぜっ！ ぜっ！ ぜっ！ ぜっ！ ぜっ！ ぜっ！ ぜっ！ あんなんだから姉様は姉様なんだぜっ！ っていうか、据え置きハード時代はもつと貞淑っていうか、優しい性格してたつての、ぜったい！」

などとのたまいつつ、電柱の上に上り、柱に頭を打ち付ける大人ルナーサという酷い絵面を目撃した。ちなみに「ぜっ！」の掛け声一回につき頭を打ち付けるモーションが入る。そして一発の頭突きで少しだけ電柱が揺れる。ルナーサと言う機体に対しての、株が色々ストツプ安状態である。とはいえど、長時間放置するのも痛々しい。既に幼稚園児くらいの子づれの親子が「ママ、あのお姉さん——」「しっ、見ちゃいけません！」などとよくありがちで、かつ納得のできる危険人物判定をしていたりするので、ますますもつて続けさせるのはかわいそうである。というか普通に近所迷惑だし、公共の器物破損である。

大体琥太郎の中で、ルナーサに対する認識が「ほんこつ」から「かわいそうな子」に

変わった瞬間だった。

「えっと、何、やってるの?」

「ぜぜっ!!? って、わ、わ、わ、わーっ!」

琥太郎の声に反応してバランスを崩し、そのまま落下するルナーサ。

完全にギャグ漫画とかのそれである。

地面との激突に思わず目を瞑るルナーサであつたが、しかし想像通りのダメージはこ
なかつた。恐る恐る目を開けてみると。

「ふ、ん、にゆ、うううううう、う、う!」

「こ、琥太郎様!」

驚くべきことに、琥太郎がルナーサをお姫様抱っこで受け止めているではないか!

単純な話、男子高校生にしては小柄、華奢、一見少女のような愛らしい容姿をしている
少年である琥太郎が、である。そもそも見た目、ルナーサやベータより頭一つ半は下の
身長の方が、ぎりぎり踏ん張って受け止めている。単純計算で90キロは超える(※積
載兵器を勘案した際の重量) 大人ルナーサを、どうにかこうにかして受け止めている。
ただこの事態をもつてして、ルナーサは驚愕に目を見開いた。

と、限界が来たのか、ぼてん、としりもちをついてルナーサを落とす琥太郎。

「う、ご、ごめん……、意外と重かつた……」

「！ お、女の子にそういうこと言っちゃいけないんだぜ、オイ！」

なお言いながらも顔真つ赤つかなルナーサである。リアクションは意外とわかりやすいと言えた。そんな彼女に、理々は呆れたような苦笑を浮かべて続けた。

「ころ太、これでも結構力とかあるのよ？ 喧嘩だつて強いし」

「のぜ？」

「お母さんが亡くなつてからかしら。私ともう一人とでころ太、ずっと守る訳にもいかないつてさ。守られるわけにもいかないつて。ころ太も色々頑張つて、今じゃ私より腕力とかもあるんだから。ま、見た目は全然かわんないけど」

「うう、言いすぎだよ、りりさんや」

ルナーサを抱き起した後、琥太郎は「むう」と困つた顔になる。それを見て、理々はたいそう楽しそうに笑つた。

「——ふむ、なるほどであります」

「わっ！」

と、琥太郎と理々の足元に、ちみつくく戻つたベータが腕を組んで頷いた。おそらくエネルギー切れなのだろう。そして、琥太郎と理々の様子を見て、茫然としていたルナーサは、はつと我に返つた。

「ルナーサ。どうやら貴女に設定されたカルマを、コタロー様はきちんと体得してるよ

うであります」

「ぜっ」

『誰かを守るように』というそれは、もう大丈夫のようであります」

「のぜ………」

「ルナーサ——」

と、ぴよこぴよこ足音を立てて移動し、大人ルナーサの耳元に飛びついてひそひそと、何事かを口走るベータ。それを聞いた瞬間、ルナーサの顔が驚愕に染まる。ベータの顔と、そして琥太郎の顔を二度見して、自嘲げに笑った。

「——なるほど、そりゃ、敵いっこないか」

「?」「?」

「ルナーサ。ともあれ、私も貴女も、この場でやれることはもうないのであります。だから、とつとつとゲロるであります」

「ぎやつ!?! ちよ、姉様、ヘッドロック止めて……!」

「はげるであります。はげるであります。その怪獣みたいな名前の髪型が抜けちまえであります」

「止めてあげて!?!」

ちみつこ状態のベータでは手足の丈が足りないせいか、ルナーサのツインテールを遠

慮なく引つ張り、引き抜きにかかっているベータであった。既にぶちぶちと、数本髪が切れるような音が聞こえたような、聞こえなかったような。「薄情するから止めてくれ
せ〜〜〜!」と絶叫するルナーサに、ようやくベータは手を止めた。

「ゼーっ、ゼーっ、ゼーっ、……で、何を聞きたいんだ?」

「あの後——私が殺された後のことであります」

「?」

理々は何か、ベータの言い回しに違和感のようなものを感じたが、特には指摘しな
かった。

「据え置きだった貴女をはじめ、六台の学習中、設定中だった集積回路、つまりAIが存
在したはずであります。それを奪ったのは誰なのであります?」

「って言っても、お姉様、予想はついてるんじゃない?」

「だからこそ、であります。一体、何が目的でコタロー様を狙うのか、理由を知りたいの
であります」

「あー、だったらアレだな。まずは、深山博士のり——」

次の瞬間、琥太郎、理々、ベータ、ルナーサの四人は、爆風で弾き飛ばされた。

「り、りり？　大丈夫？」

「ころ太？」

ぺち、ぺちと顔をはたく琥太郎に、理々はうすく目を開けた。間近に迫る真剣な顔の琥太郎は、やはり格好良いとか凛々しいとかより愛らしいという表現がしつくりくる。だが、それでも自分を庇うよう上から覆いかぶさった幼馴染に対して、理々は思わず赤くなり、突き飛ばした。

「げうう」

「あ、あ、ごめん。大丈夫？」

「て、照れるならもうちよつと女の子らしい感じにしてくれないかな……」

「そ、そんなこと今関係ないでしょ！　っていうか気絶して意識が戻った時に押し倒されてたら誰だつて突き飛ばすわっ！」

「あはは……。つて、あ、ベータさんは？！」

上体を起こす二人。と、その眼前には、黒い煙のような何かが渦を巻いている。その中心にはやはり小型のベータがおり、中空に浮かんでいた。

ベータは前方上方を見上げる。と、そこには小さいサイズに戻ったルナーサ（なお目元が漫画みたいにおめめぐるぐるといった感じである）の首根っこをひつつかむ、翡翠

のメイドが立っていた。大人サイズで、やはり口には布のマスク、顔面は仮面舞踏会にでも出れそうな様相である。

ただし、前回とは目の色が違った。

『勝手なことしたら、困っちゃうじゃないか』

『——その声、やはりクリック・クラックでありますか』

クリック・クラックと呼ばれた翡翠のメイドは、右手をルナーサたちに差し向ける。

『射滅』しやめっしゅ

『つー』——ベルテイン・ケイオスシステム！』

両手を広げて琥太郎たちの前に掲げるベータ。と同時に、その前方に黒い煙のようなそれが結集し、巨大な掌が二つ現れる。それらは琥太郎たちを守る盾のように成立し、しかし、何かしらの爆撃と思われる、不可視の攻撃に、弾き飛ばされた。

破片が飛び散る。ベータの顔面の左頬のパーツがはじけ、下側、カーボンと基盤と緩衝材、そして超小型の空調ファンが回っているのが視認できる。メイド服もぼろぼろで、両腕はそもそもシルエツトからして存在していない。

「ベ————ベータさんっ」「ちよ、ベル助!？」

慌ててかけよる琥太郎と理々だったが、ベータはそれに、肩と腕の一部のみが残った左側を向けて、まったをかけた。

にらみつけるベータ。そんな彼女と琥太郎たちとを一瞥し、翡翠のメイドは、鼻で笑った。

『バレちゃったんなら、仕方ないや——ボクの名は、クリック・クラック。』

よろしくね? コタローお兄ちゃん』

「へ?」

光とともに無数の0と1の文字のホログラフィックをまとい、翡翠のメイドは姿を消し。
ベータはそれを見送ってから、その場に倒れた。

FILE. 07 知らない彼の一面

「美味であります！ 美味であります！」

「そうかい？ いまいち紗月さんからは褒められた覚えがないんだけどね」

「いえ、それは単に照れ隠しだったか意地を張っていただけであります……、ともかく美味いであります」

深山家、琥太郎の自宅にて。父が作る料理に舌つづみを打つベータを前に、琥太郎は左頬がひきつった笑みを浮かべていた。

「ベータさん、なんかこう、元気だね……、あれだけ破損していたのに」

ことの経緯は、昼間、クリック・クラックを名乗る翡翠のメイドと対決、小型モードにてポロポロとされてしまったベータをどう修理したものか、というところであった。理々といっしょに破損した腕の一部などと共に、自宅に持ち帰ってさあどうしたものか、というところで、父親がそれとなく一言。

「ごはんを食べれば治るんじゃないかな」

まったく意味不明なセリフであったが、しかし実際に彼が持つてきたポテトチップス（のり塩）をベータの口に持つていくと、機能停止しているはずなのにカシヤカシヤ音を立てて食べ始めた。一袋平らげるところには、いつの間にかやら両腕に、棒と球体関節で作ったような簡単な腕が装着されており、そして再び目をかっと思開いて。

「ごはんを所望するであります。ごはんを所望するであります」

「これ、私じゃないわね。帰る」

「まって、僕を一人にしないで……！」

夕方、少々早めの夕食の時間だったが、平然と四肢は快調、頬の破損した箇所も平然と修復されている様子である。なぜか一緒にメイド服まで再生しているのが不可思議といえば不可思議だが、まあもともと大きくなったり小さくなったりしてゐる時点で質量保存の法則にケンカ売つてゐるのだから、いまさらといえばいまさらだった。

なお琥太郎必死の懇願により、理々もこの場に同席しており、琥太郎以上に奇怪な、面倒そうな表情を浮かべていた。

「って、いやいや、やっぱりおかしいでしょ!? なんでアンドロイドが食事で回復するの！ お父さん！」

「まあそういう設計らしいから」

「どういう設計!？」

「僕も詳しくはないよ。まあ紗月さんだし」

「それでなんでもかんでも納得しちやダメだよね!？」

だが誰が実際どう説明するということもないので、それで納得せざるをえない琥太郎であった――。

「いや、なんでそれで納得できるのよっ」

完全に無言を貫いていた理々が、さすがにとばかりに突っ込みを入れた。

「ベル助もベル助だし、義父おとうさんも義父おとうさんだし。ころ太もころ太よ」

「おやおや」「まあまあ、であります」

「?」今、なんか変な発音に聞こえたような――」

「うるさいっ。そんなことはどーでもいいの。重要なのは、ベル助含めクリック・クラックとか言ってたアレが何なのかってことでしょうが!」

「「ああ」」

「なんで私が、話の論旨を整理する立場になってるのよ……!」

頭を抱えてうなる理々と、いまいち何事かわかっていない様子の琥太郎。なおペータと琥太郎の父は顔を見合わせて肩をすくめたあたりからして、いろいろと確信犯の可能性が高い。

「で、どうなのベル助」

「ふむ。あの、クリック・クラックとは何なのか——その説明にはまず、深山博士が何を研究していたかということについて、お話しする必要があります」

「お母さんの研究？」

「本来は守秘義務であります、プロジェクト自体は取りやめになったはずなので、話してももう問題ないであります。時効というやつであります。」

——さて。深山博士が出向していた研究機関とは、つまり某国の災害研究センターであります」

「災害研究センター？」

「いまいちつながりが見えない琥太郎たち。ベータがテレビ画面に手を向けると、どこからともなく画面の映像がハイジャックされ、世界地図、地震マップ、噴火マップ、台風マップなど様々な災害情報が映し出される。」

「深山博士は機械学習、および集積回路の技術系の研究者であります。ひいては趣味が高じて、それを搭載したアンドロイドの開発なども、友人知人数人で行っていたであります。我々E M A—Dシリーズがその最たる例であります。」

「その前提を踏まえただうえで、であります。深山博士が招かれた理由としては、つまりところ人口知能の開発プロジェクトがあったからであります」

「僕も、そのあたりまでなら知ってるかな」

父親の言葉に少しだけ驚くも、琥太郎はベータに続きを促す。

「クリック・クラックとは、そこで開発されていたAIのひな型——我々よりも高度な人口知性であります」

「高度？」

「私たちは、おそらく外見上は人間とそう大差ない立ち振る舞いを行っているかと思っております。しかし、本質的には違うであります。膨大な学習パターンをもとにしているのではなく、深山博士のセンスで振る舞いや行動パターン、内容を『選ばれ』『設定されて』いるであります」

「あ、だからお母さんの趣味だっていうのか」「つまりベル助とルナ助みたいなのが、まだまだいっぱいいると……」

「でも、クリック・クラックは違うであります。グレート・アルティメット・ワン——自己で完全

解決できる知性として。あらゆる災害シミュレーションを自動で行い算出できる、そういった特殊なAIのひな型として設計されたものであります」

あらゆる災害シミュレーションが可能なシステムを作ろうとした結果、人工知能に頼ろうという発想になった。その予測には究極といえるほどの知性が必要になったがゆえに、深山博士をはじめとした研究者が集められ、実験を行ったということらしい。

と、ここまで話したあたりで、理々は肩をすくめた。

「つてことは、よくありがちな話だと、アレかしら。反逆でもされたのかしら？」

「おおむね正解であります。発展途上であつた知性たるクリック・クラックは、ある時反逆を起こし、プロジェクトは凍結をせざるを得なくなつたのであります」

「で、それがお母さんの作つたアンドロイドを乗っ取つてきてるつてことか……。ところで、なんでいまさらなの？」

「少なくとも大本のハードは破壊されたはずであります。それでもなお生き残つているとなると、当時、今ほど発展していなかつたインターネットなどを利用したか、定かではないであります。ともかく何らかの手段でバックアップをとつていたものと思われるであります。協力者とも、見解は一致してゐるであります」

「「協力者？」」

そういうえば、そもそも破損していたらしいベータを修理してこちらに送り届けた誰かについて、一切話を聞いていなかった。そのことに思い至つた三人であつたが、ベータは小さい容姿に似合う、愛らしいほほえみとウインクをかまして。

「企業秘密であります」

直球で、誤魔化すことなく隠した。

「いや、なによ企業秘密つて……」「ベルさん、別に商売じゃないんだから……?」

「まじめな話をすると、第三者には明かさない約束だったでありますし、話したところで誰も別に知らないことでありますので、意味がないのであります。ただ復活したクリック・クラックの機能停止が目的に違いはないので、お互い持ちつ持たれつ協力してあります。

とはいえ、敵の正体が解ったところで、敵の目的が不明慮なのは実際変わらないのであります」

「記録によりますと……、あの時はまじめに、人類支配をもくろんでいたようでありませう」

「なんてもの作ってるんだよ、母さん……」

決着が見えない話ではあったが、しかして故人たる母親の影響力めいたものを、感じざるを得ない琥太郎たちだった。

※

「いくら暴走したからって、世界征服とか……、絶対、ころ太のお母さんの影響でかいで

しよ……」

「あはは……」

家が近所のこともあり、夕食が終われば琥太郎が家に送っていく。ごくごく自然な流れで立ち上がる琥太郎に、何も言わず送り出す父親。ベータは「護衛するであります」と言っただけだが、直後、ふらりと倒れてはそれどころではあるまい。体そのものは再構成できても、それを動かすだけ電力だのその他の要素が足りていないらしく、どこからともなく取り出したUSBのACケーブルをコンセントに接続し、チューブ飲料でも食べるかの如く、かぶりとかじりつくベータであった。

その様にも色々突っ込みを入れたい琥太郎であったが、さすがに今日は疲れたのでそのあたりは放棄して今ここに至る。

「それにしても本当、意味不明よね。なんで命なんて狙われてるのよ、コロ太」

「さあ……。別に、僕って出自が特殊なわけでもないし」

「容姿が女の子なこと以外はね」

「うっ、それは言わないでほしいんだけど……!」

「だって考えてもみなさい。ころ太が女装したのと私とで一緒に歩いてたら、絶対ころ太のほうがナンパされる確率高いわよっ。ああいまいましいっ」

「そんなに!」

実際そんな容姿である。理々が少し荒つぽい印象もある少女だとするなら、琥太郎は守つてあげたくなる美少女風な容姿だ。外観の美醜、アピアレンス、APPでいえば3か4は差がある。それはそれは可愛いらしい琥太郎だった。

「いや、それはないんじゃないかなさすがに。ほら、りりさんのほうがその、可愛いと思
うし」

「うっ、まあ、アリガト……」

少し照れたように顔を背ける理々と、これまた照れたような琥太郎である。

と、不意に理々が「思い出した」と言わんばかりに、はつとした表情で琥太郎に言う。
「ねえ、来週に海行かない?」

「海?」

「うん。沖繩」

「なんでそんな唐突に……」

「ここ数日ころ太、いろいろあつたじゃない? だから、気分転換に。春先だけど泳げる
らしいし」

「道民つて汗腺なまつてるから、色々大変そうだなあ……」

「ダメ?」

「あー、いいけど。耕平も来るよね?」

「う、ま、まあ来るわね」

「何その反応？」

「な、なんでもないわよつ。」

どちらにせよベータはついてきそうではあるが。

ともあれ約束だからね、と小指を差し出す理々に、戸惑いながらも琥太郎も指をからめた。ほんのりと冷たい指先の感触に、意外と、どきどきする琥太郎。「どうしたの？」という理々の反応に、なんでもない慌てて手をひっこめた。

「ここままでいいわ。じゃあ、水着とかちゃんと用意して——」

「——おお、奇遇じゃないか一年坊主！」

と、突如この空気に割り込んでくる不良が一人。蛍光色とまでは言わないが、痛々しいほどに明るい金に染め上げた髪に両耳ピアス。その左右には茶髪のパンチパーマと妙にてかつた黒いリーゼント。今時珍しいくらいのテンプレートな不良だが、「今日から俺は!!」が三十年後ドラマ化されるような時代だし、一周回ってアリなのかもしれない。いや単に琥太郎の生活圏に、ほかにあまり不良っぽいのが居なかったりするだけな

ので、全国的にどうなのかは分からないが。

彼らと琥太郎との因縁は入学式の一週間前後のあたりだったろうか。まあ大概しうもない理由なので、琥太郎は思い出すのも億劫である。

「ここであつたが百年目——今日こそお前が女だつて証拠をつかんでやんよつ！」

この第一声を前に、理々からしてぼかんと、開いた口がふさがらない。

左右の二人も「兄貴……」となんとも言えないリアクションである。

対する琥太郎は冷めた目で。

「パンツ脱ぎましょうか？」

「破廉恥っ！」「兄貴!?!」

「何これ、ころ太、何これ？」

「いや、待て、脱いだ姿を確認しなければ、そこにはコイツが男の世界と女の世界が同時に存在していることになる……! だからそれはいい」

「そうですか。一発で全部解決するの……」

ともあれおおむね週に一回、あんなことを宣いながら絡んでケンカを吹っかけてくるのである。さすがに理々たちに話すのも気が引けているし、そもそも女性的な容姿をしていること自体にコンプレックスがある琥太郎である。友達や知り合いならいざ知らず、こうも知らぬ他人というか上級生というかに絡まれては……。

「ころ太、怒ってる?」

「ちよつとね……」

「ん? おお、何だ今日は女友達も同伴な——」

「兄貴!」

理々に手をまわした瞬間、琥太郎の足払いが炸裂! 激痛に足を抱えうずくまった瞬間、特に気にせず琥太郎はそれを蹴り飛ばした。手慣れているし、作業めいた風景で非常に恐ろしい。さしもの理々も二の句が継げない。

呆然とする残り二人に冷めた目を向けると、「きよ、今日のところはこのくらいに」とか言い出して兄貴分を両側から持ち上げて逃げて行つた。

「やっぱり、家の前まで送るよ、りりさん」

「琥太郎、殴つた直後にそのサイコパスみたいな純粹な笑顔やめよ? ね、色々心配になるからさ」

なぜか真剣な目をして琥太郎の両肩を持ち、呼び名さえ普段のあだ名を忘れ、ただただ理々は諭すように繰り返した。

FILE. 08 君がいつか居なくなつた空

「いや、僕の水着まで買う必要あつたのかな、理々さんや」

「う、うるさいわねっ。必要あんのよ。大体私にビキニ薦めといて嫌味!？」

「ちよつと、何に激昂してるかちよつとわかんないや……」

「ははは、まあ言つてやるなよ、ほれほれ」

週末の沖繩旅行に向けて、理々と琥太郎は水着を買い出しに行つていた。当然部活はサボりである。何もそんなに急がなくても、とうか学校のを使えばいいんじや、という琥太郎の意見に有無を言わせない理々と、ひらひら手を振りついてくる耕平という絵面が中々に連携がとれていた。

時刻はまだ夕方。いつかのように理々を送る琥太郎であつたが、もつとも今回は二人きりというわけではない。琥太郎の背中につついて、ペータがひよつこり顔を出していた。ペータは半眼で琥太郎の頬をつつく。

「コタロー様とて、ブーメラランパンツは嫌なはずであります。ブーメラランは嫌なはずであります」

「うっ、それはそうだけどさ……。でも、似合うと思つて……………」

「ころ太のスケベっ」

「いい趣味してはいるわな」

「そ、そういう意図があつたわけじゃ——」

「つていつても、仕返しに女物の水着を着せる理々も理々だと思ふけど」

「だ、だつて私ばかり損してるじゃない！」

「そ、損?!」

「そういうところ、押しが足りないであります。足りないであります」

「あー、もう話がややこしくなるの、ベル助っ」

しかし琥太郎からすれば、ただただ純粹に、空手だの何だの色々と学んでる彼女のスタイルには合っているという、彼個人の率直な意見だつた。ちなみにそれを受けて色々妥協した結果であるが、おおむね次話か原作2巻をご参照あれというところであつた。筆者も最近ようやく物理書籍を手に入れられたとか、そういう余計な話はおいておいて。

「しっかし何ていうかアレだよなー。ホント、よくまた仲良くなったよなお前らも」

「?」「別に、ずっと仲良しじゃなかった? 私たち」

「いや、そうだけどそうじゃねえって。俺も詳しく知らねえけど、小学何年生くらい頃だったか忘れたけど、大ゲンカしたことあったじゃん。あれからよくもまあここまで回復したもんだなって思つて」

「あれ、そこまで酷かつたの、私たち……?」

「正直、琥太郎が男らしくなつていったのつてアレ以降だと思つてる。まあそれでも女の子っぽいけど」

「あはは……、撤回を要求できない自分が悲しいなあ……」

「そんなに大ゲンカだったでありますか?」

ベータの言葉に、耕平が二度頷いた。大切なことなので二回主張したいのだろうか。

「ふむ。さすがにそのあたりは深山博士のデータにもないところでもありますね……。バルテルミー博士もすでに帰国していただであります」

「バルテルミー?」

「お母さんの同僚さんで、当時天才少女だった人。理々は覚えてない? 今でもたまーに遊びに来てるけど」

「あー、なんか金髪さんだったかしら……?」

「ちなみに、私たちの開発協力者の一人でもあります」

「完全に公私混同してるじゃん、お母さんたち……」

困ったように笑う琥太郎。やはり頭を抱える理々。よくわからないけど楽し気な耕平と、そして琥太郎と理々にじろつと半眼を向けるペータ。視線に気づき思わずたじろぐ二人に、ペータは「で？」と催促した。

「でつて？」「何よ」

「だから、いったい何があつてケンカしたでありますか」

顔を見合わせる琥太郎と理々。と、ふと理々が「あつ」と面倒そうな顔になった。どうやら何かに思い至つたようである。

「あー、あれよね、たぶん。思い出したわ。ちょうど話題にあがつた、バルなんとかさんが来てたときの話じゃない？」

「んー？ ……ああ、あれね」

苦笑いする琥太郎とばつが悪そうな理々。

「俺もちよつと興味あるけど、なに、何か大変なことだったりするか？」

「そういうわけじゃないけど……、まあ、単に行き違いしてたつて感じよ」

「いや、ちよつと違うかなーと。うん、僕、あの時の理々のことは格好良いなーつて思つたかな」

「……………つ！」

顔を真っ赤にして琥太郎をにらむも、にこにこ笑顔の彼の前にすぐさま意気消沈する理々。琥太郎は苦笑いしながら空を見上げ、そして口を開いた。

※

深山琥太郎、当時は小学一年生。

その頃はもうすぐ二年生、春休みのほんの少しの時期のうちのいつかが、母親の一周忌だった。

大体、三月の中ごろか。いまいち理解していない様子のまま、彼は黒い喪服のまま、仏壇でダブルピースする母親の写真を不思議そうに見ていた。

「お母さんはいつになつたら帰つてくるの？」

ただただそれを父親に聞き、何も言わず彼は琥太郎を抱きしめるばかり。彼女の親友だった理々や耕平の母親もまたそれに涙し、子供たちはやはりどこかわからないといった顔をしていた。

いや、違う。唯一、理々だけは三人の中で、何かを察したように目を伏せて、写真を

ちらちら見ていた。決して「もつと良い遺影なかったのかしら」とかそんなことを思っているわけではなかったろう。遺影とイエーイみたいなおやじギャグめいたアトモスフィアを醸し出していることと無関係なはずだ。

当時からすでに父親が女装をはじめるといふ謎の言動を行っていたりもしたのだが、そのことについてもいまいち理解していなかった琥太郎である。当時六歳の彼は、しかし今だ情緒の面においてその事実を処理しきれないでいたのだ。

そしてある日、事件は起こった。

「おとーさんが、おかーさんみたいになかったこうしてて、それがなんかおつかしいの！だからわたし、おかあさんがかえってきたら、たくさんはなすんだ！」

「……………いつまでも、おかーさん、おかーさんて言ったらだめよ、ころた」

「りりさん？」

「しんじやうつていうのは、そういうことなのよ」

「？」

「もう、かえつてこれないってことなの——もうあえないってことなの！」

それは、彼女の遺体を直に見たわけではなかったことも理由の一つかもしれない。

実験場での事故だか台風だか、いろいろ要因が重なった結果亡くなったというレベルの情報であり、彼女の遺体は損壊状況がひどく、肉片すら残っていない。結果的に遺品

くらいしか帰つてこなく、葬式においても納骨などをしたことがなかつたせいもあるだろう。いまだに母親がどこかで生きているような——そんなふわふわした感覚が、琥太郎の中に存在したのだ。

だからこそ、母親の實在を前提に話していた琥太郎に、理々は耐えきれなくなつた。彼女は知つていたのだ。親類の死を。その際に、明確に死というものの恐怖を、正面からとらえたのだ。

それ故に、琥太郎の言葉に我慢できなかったのだろう。

真実を伝えることが正しいことだと。わからないままにするのはいけないことだと。

だからこそ——その死の気配というものを明確にとらえてしまった琥太郎は、彼女からデイトールを語られるまでもなく、彼女の言葉をもとに葬儀の際も、それ以降の母親がいない時期も、すべてひっくりくるめて記憶が連鎖し、それを知ってしまったからこそ、泣いてしまった。

理々もそうなつてしまうと気づかず泣かせてしまい、そしてそのショックでわんわん泣いた。二人そろつて大泣きである。

理々は母親に話すことができなかったものの、琥太郎はただどしくも、母親に二度と会えないのかということ、父親に聞き始めていた。父は何も言えず、ただただ抱きしめるほかなかつた。

「——琥太郎君、危ないですよ」

「あ、シアおねえちゃん」

2階のベランダから星空を眺める琥太郎に声がかけられる。長い亜麻色の髪を適当にまとめた、碧眼の少女。当時はまだ、あまりおしやれなど服装に頓着してる雰囲気はないが、目鼻立ちはずつきりとした、化粧つきのない彼女。母親と一緒に働いていたらしい、オルテンシア・バルテルミーである。

彼女は「乗り出したら落ちちゃいます」と彼を抱えると、そのまま膝の上ののせて両腕を組んで作ったシートベルトで腰のあたりをロックした。

「琥太郎君、空を見るのが好きですね」

「うん。すきー」

「なんで好きなんですか？ シアお姉ちゃん、琥太郎くんのが気になります」

「んとねー。わたしも、よくわかんない。わかんないけど、こう、すごい！ すごいのだからすき」

子供らしく言葉にはうまくできていないが、それでも琥太郎は必死に言葉にしようとする。それをほほえましく見ながら、彼女は琥太郎の頭をなで。

「深山博士——琥太郎君のお母さんは言っていました。琥太郎君が小学校にあがったら、できればずっといてあげたいと」

「えっ」

「だから、できる限り頑張ると。お父さんとも相談して、色々手をつくすと」

「……………」

お母さんの嘘つき、と。

小さくつぶやいた琥太郎。震えながら、涙が流れる彼を、やはり彼女はそつと抱きしめて。

「男の子は、泣いちゃいけないんだそうです」

「わたし、よく、わかんない……………」

星空の下、小さく琥太郎は涙を流していた。

※

「すまん、そこから仲直りできるビジョンが全く見えないんだけど」

「あはは……………」

琥太郎の話を聞き、ばつの悪そうな理々と、困惑した様子の耕平。一方ベータは普段

通りというか、冷静に話を聞いている。

「で、そのまま四月入ってからしばらくもぎくしやくしてたのは事実なんだけど、アクシオンを起こしたのは理々さんのほうだったんだよね」

「……………」

「で、何言つたんだ？」

ちらりと理々のほうを見る琥太郎。彼女がしぶしぶとうなづいたのを見て、少しだけ微笑み。

「——理々のおばあちゃんが亡くなったときの話をされたの」

ベータと耕平は、二の句が次げなかった。

「昔、理々はお祖母ちゃん子だったってさ。だから亡くなったとき、すごくシヨックが大きくて。でも、だんだんとそれを忘れようとして、忘れないと辛くて仕方がなくなつて。お母さんが家にいてくれるようになったけど、それでもお祖母ちゃんがいなくなつてしまった分を埋められなくて、だから必死で忘れようとしたって。」

でも——」

『——でも、それじゃダメ！ おかあさんがいなくなつちやつたことから、にげちゃ

だめなの！ たいせつだから、かなしいのはころただけじゃないの！ ころたのおかあさんも、わたしのおかあさんも、わたしだって！

だって、それじゃ、おかあさんがかわいそう！ わすれられたら、さみしいもの！』

空を見上げ、遠い目をする琥太郎。普段、子供っぽいというか、かわいらしい女の子めいた雰囲気であることも手伝つて、その横顔は妙に大人びて見えた。

「泣きながら、強がつて叫ばれちゃ、ね。でもあれは、ホント、かつこよかつたなーつて」
「……私も、色々、考えるところがあつたのよ。まあ、そういうこと」

「誰に言い訳してるでありますか」

「う、うっさいつ。つていうか、そもそもなんでこんな黒歴史みたいな話になつてるのよ、やめなさいつてばー！」

ぎやーぎやーと殴りにかかる理々と、買い物袋でガードする琥太郎と耕平。「おいおいおい！」とほほが引きつる耕平と違い、琥太は苦笑いしながら「まあまあ」と止めた。そして夕暮れの空を見上げ。

「ほら、顧問の、更科先生も言つてたよね。絵を描くことは魔法だつて。だつたらさ。僕もいつか、お母さんとちゃんと向き合つて、描くことができるかなーつて」

「……その前にころ太はちゃんと、描けるようになってからじゃない」

「だな」

「え、ちよつと二人とも酷くないかな!？」

わいのわいのと仲の良い三人を前に、ベータもまた空を見上げてから。

「——なるほど、だからなのかしらね」

らしくないように、口調を崩して頷いた。

※

「——でも、それじゃダメ! おかあさんがいなくなっちゃったことから、にげちゃだめなの! たいせつだから、かなしいのはころただけじゃないの! ころたのおかあさんも、わたしのおかあさんも、わたしだって!

だって、それじゃ、おかあさんがかわいそう! わすれられたら、さみしいもの!」
理々の言葉に。夜の公園でうずくまっていた彼に。理々は泣きながら、肩をつかんで正面から向き合っていた。

時々、家に帰ってくるのが遅いと。父親とオルテンシアとが探してるのをたまたま

理々が目撃。私なら場所がわかるからと走り、そして公園のアスレチックのぶらんこを漕ぎながら、じつと空を見上げる琥太郎。それを見て、なんだか理々は泣きたくて仕方なかった。

彼女の涙が伝播したように、琥太郎もベそをかきはじめている。理々も悪いわけではない。ただそれでも、彼女が自分に直視させたということから苦手意識めいたものが生まれてしまつていたというだけで。実際のところ、理々もまた向き合わなきやと。そうじゃないといけないと涙ながらに話されては、琥太郎も逃げられなかった。

「だけど、わたし、わすれられないよ——おかあさんの、おはかつて、いみが、わかつたけど……！ だって、おはかまいりなんて、できないよ！」

「わたしだつてできないもん！ おばあちゃんのおはかまいりなんて！ でも、もうおばあちゃんもいないもん！ だからわたしがこなかつたら、おばあちゃんも、わたしにあえないもん！」

「りりちゃん……」

「だから……、だから、わたしだつて、わすれられないもん。わすれられないから、でも、だから、すこしずつ前をむかなきやいけないんだつて。だから、ころたも……、そのときは、いっしょにきてくれる？」

泣きながら、しかし声を荒げず。

琥太郎に必死で笑いかけようとする理々に、そして、琥太郎は夜空を見上げる。

「おかあさん、ひこうきにのるはずだったんだって」

「……………」

「てんごくとかさ、あるか、わからないけどさ。あえないんならいつしよだって。でも、おかあさんにいたいって、わたしがしんだら、おとうさんともあえなくなるし、りりちゃんとも、こーへーともあえなくなるから。それも、いやだなって」

「ころた……」

「だけどさ？ おかあさんも、このそら、みてるのかな——」

自分の中にあるそれを消化しきれないまでも。琥太郎は涙をこらえながら、理々の目を見つめる。両手も震え、体の感覚も薄く。それでもなお、理々と目を合わせて。

「だったらさ。ぼくも、おかあさんも、さみしくないのかな？」

「ころた——」

「りりちゃん……………！ でも、ぼく、さみしいよ……………！」

抑えきれないように、理々に抱き着く琥太郎。声も涙もこらえて、ふるえる。

そんな琥太郎を、泣きながら理々も抱きしめ返す。

「ころた……、じゃあ、がんばろ？ ちよつとずつさ」

「うん……」

「ちよつとずつ、いまはむりでも、いつか、おかあさんのさ。おはかまいり、いこ？」
「うん……、うん……」

「ころた……」

「りりさん……」

琥太郎も、理々も、どちらも泣きはらしながら。

それでも、それでも立ち上がろうと。

公園の入り口で、オルテンシアが泣き続ける二人を見つけるも。それでも涙ながらに、そつと、泣き止むまで見守っていた。

いまだに琥太郎は、母親の墓参りには行けてない。

FILE. 09 アンドロイドと魅惑の水着と実際オゲ
ヒン！

「……………」

「ど、どうしたの？ りりさんや」

「な、ん、で！ あれほどちゃんと計画立ててたのに——なんで今日に限って雨なのよ！ しかも超さむいしっ」

絶叫する宮内理々であったが、さもありなん。

彼女たちはわざわざ沖繩に来ていたというのに、現在、室内である。春先でも海に入るくらい陽気だろうと予報されており、それを前提に計画を立てていた彼女であったが、結果として本日雨天、気温、水温ともに冬に近い状態である（とはいえど2月ほどではなかったが）。

なお子供たち三人に加えてベータ（大きい版）が引率に回るということで各家庭の許

可を得たうえでの、一泊二日旅行であった。

第二案として琥太郎がアドバイスしていた、ホテル内の室内温水プールでちやぶちやぶしている二人であるからして、理々のメンタルには色々とダメージがあった。

「納得いかないわよ、なんで……、いや天候に文句つける話でもないんだけど、それでも」「ま、まあまあ……。とりあえず僕らだけの貸し切りみたいだし、それはそれでいいんじゃないかな? 身内意外に地肌をさらさないで済むってすごくいいよ、うん」

「ころ太、そんなに水着を着るの嫌だったの……?」

ともあれ、それはともかく。あからさまに、水着なのである。
水着なのである。

理々は明らかに気合が入っている。本来彼女ならセパレートタイプで妥協していただろうところ、あえてワイヤービキニの黒にひらひらが付いている。腰にパレオをまくまでもなく全体的にひらひらとしており、それがわずかにバストサイズを盛る。もつともそういうったアピールに対して琥太郎の反応は「似合っている」「かわいい」といったあたりなので、彼女が目的としているあたりに関して推して知るべしではあった。もつとも空手で鍛えられたしなやかな全身、スレンダーではあるが成長途上なのが伺いしてスタイルは将来性はともかくとして彼女の水着とマッチしてはいた。

一方の琥太郎はといえば。

「……………それ何?」

「何って、ラツシユガード」

徹底して肌を見せようとしめない防御力高めのスタイルだ。肌を見せるのにはなぜか抵抗があるようだが、ボディラインが出ている水着であれば男性らしさが強調される結果となっている。

ちなみに耕平は普通にトランクスタイルのそのの上からアロハシャツをまといっている。着こなしは適当ながら意外と様になっていた。

そして。

「何かトラウマがあるようであります。トラウマがあるようであります」

省エネルギーモードというか、例の小さいベータである。日本人形よろしくよりはいくらか大きいものの、小さいサイズにどこから入手したのかびったりサイズのスクール水着。胸元にワッペンがないのが逆にハンドメイドじみている。

「トラウマ?」

「わたくし、よくは存じ上げないのであります。存じ上げないのであります。それはともかく荷物番をしているので、お三方は水遊びしててであります。水遊びしててであります」

「つーか、なんで…………?」

「重量があつても足がつかないので、沈むのであります。沈むのであります」

「大きくならないの?」

「今はエネルギーを貯めているであります。……何か嫌な予感がするであります、するであります」

「嫌な予感で……」

「いまいち意味不明なベータであるが、頑なに水に入りたがらないので琥太郎たちは一旦保留することにした。

温水プールとはいうが温度は生温かな具合に調整されており、お風呂に入っていると
いう感覚はない。ホテル付のものにしては意外と広く、広さだけでいえば体育館くらい
はあるだろうか。全体の形状はひょうたんのくびれが多数のうな円が連なったような
形。中央に島のようなものがあり、全体でゆるやかな流れるプールとなっていた。

という訳で、誰に言われるでもなく琥太郎が準備運動。

二人は水に飛び込んでからそれに気づいた。

「あー、そういうえげばしてなかつたなあ」

「だめだよ、二人とも」

「ご、ごめ……つて、なんで止めてくれなかつたの? ころ太」

「いや、止めるまでもなく飛び込んだじゃったし……。まあ何かあつたら、僕助けるし」

「……っ」

「どうしたの？ りりさん」

「う、うっさい！」

「わっ！ み、水をかけないでえ」

琥太郎の視界いっぱいには水が飛んでくる。塩素の辛みが琥太郎の味覚を焼く。けほけほとむせると「まったく」とちよつと怒りながら、階段を伝って降りて行った。

「もー、やったねりりさん——えいつ」

「ふ！ 甘い甘いわ、運動部ナメンじゃないわ！」

「あ、耕平!? ちよ、おぼれてる！」

「えっ!?!」

はつと振り向く理々。

耕平は「あははは」と苦笑いして、腕を組んでいた。

「何よ、全然——わぷっ！」

「油断大敵！ あとこーへー、ナイス！」

「おう」

「こ、この……！ 待ちなさい、ころ太——！」

わー、きゃー、と。高校生男女三人という編成にしては、嫌に小さな子供のようなは

しやぎつぷりである。それを何ともいえない目で見つめるベータだが、あいにくとサイズが小さいためジト目をしているくらいにしか見えない。ふあああ、とロボットながらあくびをしてから、一言。

「潮風に直接当たらなかつたのは、幸いだったでありますか。さすがにわたくし、ボディの関節部分の隙間から錆びるのは手痛いであります、手痛いであります」

お昼はどうするんでありますかね、などと呟きながら、大人がけのチェアで三人のことを見守っていた。

と。がちやり、とプールの閉め戸が開かれる。ちらりとベータはそちらを見た瞬間、立ち上がり空中に浮かんだ。

『Maiden the Revolution』

「お姉さま、勝——ぶぎゃんっ！」

「性懲りもなく、であります」

大人サイズなルナーサめがけて、これまた大人サイズとなったベータによるシャイニングウイザードが決まった。見事な飛び膝、ワザマエ！ クリーンヒットしたルナーサ

はそのままごろごろと地面を転がり、扉外廊下の反対側壁面にぶつかり「ひでぶっ！」と悲鳴を上げる。

「ま、待つんだぜお姉さま……!」

「待たないであります。というか懲りていないでありますか？ その頭の中に入ってる電子回路はファミコン性能でありますか？ 旧世代機でありますか？ 学習能力の欠如でありますか？」

「ふあ、ファミコン性能でも月にはいけないんだぜ……!」

「むしろファミコンの方が高性能だったであります」

「だぜ!」

やりとりが怪しくなっている二人だが、むしろファミコンに例えたのは性能が劣化しても高性能だというベータなりの主張かフォロウか。なんともいえない妙な空気感のまま、ルナーサのメイド服の襟首を持ってずるずると引きずるベータである。

「どうか何で水着なんだぜ？」

「TPOというやつであります」

そしてスクール水着は再構成されたのか、ちょうど大人ベータの体のサイズぴったりになっていた。出るところの出ている彼女が身にまとうと、それはそれは胸元だのヒツプラインだの色々と強調されて棄権なことになっているが、そんな彼女たち二人に気付

いた耕平と琥太郎はともに吹き出した。

「ちよ、ころ太！ なんなのそのリアクションは！」

「いや、なんでもないよ、なんでも……」

「……………あんた今、どこを見比べたか言ってみ？ ぶん殴るから」

「言っても言わなくても殴るの!?! つつというか、こーへー！ おぼれてる！」

とりあえず自ら二人して引き上げ、肩で息をする。決して呼吸困難に陥っているわけでもなく、その割にはいろいろとダメージを受けたのか腹を抱えて前傾姿勢にうずくまっている彼に何とも言えない目を向ける琥太郎と、いまいち理解できていない様子の理々。

「つて、それはともかく、えつと、ルナーサさん……………?」

「はう……………!」

そして琥太郎に見つめられ、ぼふん、と顔を真っ赤にして煙を頭部から出し（比喻表現にあらず）、照れてるのがたがたと見事に誤作動しているルナーサ。はあ、とため息をつくスクール水着な大人ベータ。何よこの状況、と理々は軽く頭痛を覚えた。

「それで、一体なんで来たのですか？ 私にボコボコにされに来たわけでもあるまいし」

「だぜ!!? いや、そもそもボコボコにすること前提で話をされても——」

「琥太郎様の命を狙っているのだから、むしろ殺されないだけありがたいがたく思っほしい

です」

「そうじゃねーんだって！　そもそも勝負するのは私じゃねーんだっての！」

「「えっ？」」

復帰した耕平含めて、三人そろって頭をかしげる琥太郎たち。一方のベータは何かの気配を感じたのか、周囲を警戒している。視線をあちらこちらに振り、そして一点で止まった。

「——琥太郎様、下から来ます」

「え？　——うわひやつ！」

ベータの言葉通りにばしやんと、とプールの背後から水しぶきが上がった。果たしてそこから現れたのは、紫紺色の髪、水玉模様の紐ビキニ、ベータよりも出るとこ出ているスタイルに高い身長、意外にも締まった四肢、そして当然のように装着されてるヘッドセットの何者か。耳元にベータやルナーサ同様のヘッドギアのような何かがついているあたりからして、彼女もまたEMADシリーズとやらなのだろうか。

いや、しかしそうではない。水中から飛び上がった彼女は空中で数度回転し、まるで忍者かスパーヒーローのごとく着地。三点着地である。膝が痛くないのだろうか、否、着地と同時に「ガンツ」という金属が激突するような音声と火花。衝撃波に揺らめくポニーテール。どう見ても人間のそれではない迫力がそこにあった。もつとも人間

ではないので当然と言えば当然であるが。

すつと立ち上がるその一機。良い形をした臀部はともかく、さつと振り返り何やら愛らしくも格好良いヒーローめいたポーズを決め、ウインク。顔立ちはルナーサやベータの面影があるが、どちらかといえばチャラけた印象だった。

「ボンバー☆」

「……………」

そして第一声からしてキャラ付けが迷走していた。

「……………クリッククラックにA^{自律自我}・Eの育成は無理のようですね」

「ぜ!? だ、誰を見て言ってるんだそれ、おい、姉さま……………」

無表情ながらあきれた様子のベータ。ルナーサの反応を無視して、背後から姉妹機にチョップをかまそうとするが、ひらりとよける彼女。

ベータは半眼になり。

「何をしてるのですか、ソーティス」

「ボンバー☆」

「……………」

「ボンバー☆」

「どうしましょうルナーサ、貴女よりも酷い仕上がりになってます」

「だぜ!!？」

面食らったのも無理はない。

というより、状況が一向に建て直される気配がなかった。

しばらくこの混乱とした状況が続くかに思われたが、ここでソーティスと呼ばれた彼女が、ゆらりゆらりとしながら膝をつく琥太郎の目の前に来る。

「やれやれ、リアクションが薄いでありますな」

「へ?」

そしてそのまま琥太郎を持ち上げ、抱きしめ、くるくると回転し始めた。

「!？」

呆然とする周囲の中で、真っ先に我に返ったのは理々か。具体的には琥太郎が、眼前の相手の、それはそれは放漫なロケット二つに挟まれて目を回している様に、激怒のボルテージが勝ったせいだ。立ち上がりいかり肩で向かっていく。

「ちよつとアンタあ! ころ太に何してんの目を回してるじゃないっ」

「——おろ、どうしたでありますか?」

やっぱり口調に何かしら癖がついているらしいEMA—Dシリーズ。開店を停止させ、理々を見る。彼女の、具体的にどことは言わないが、まあどこかしらの装甲の厚みを見る。平坦ではないが豊満とは言い難いそれと、彼女自身のそれを比べる。ベータ、

ルナーサに続き、ソーティスも実際のところ豊満であった。

「ははあ、嫉妬してるでありますな、胸部装甲」

「どこ見てるのよ！ って、何かお笑い芸人みたいじゃないこれっ」

「く、苦し……っ」

そして実際、窒息しかかっている琥太郎だった。

その反応にすぐさまベータが回転し蹴りを決めようと動くが、片や彼女も琥太郎を話してベータめがけて投げつける。それを中途半端な姿勢でキャッチし、体勢を崩してプールに埋もれるベータと琥太郎。水しぶきで「きやつ」と動けない理々と、なぜか神妙な顔のままソーティスの姿を見つめたまま前傾姿勢に局部を両手で抑える耕平。その視線は実際優雅に波打つ二つの何かをとらえていた。ソーティスのバストは豊満であった。

「ソーティス姉様、何やってるんだ、琥太郎様が死んだらどーするんだぜー！」

「ルナーサあ、無問題であります、無問題であります。ともあれそれはおいておいて。E MA—D02、ソーティスでありますな。という訳で、琥太郎様をいただきに参上したであります」

「……だからなんで僕なんだろう」

ベータにより引き上げられ、琥太郎も何やら疲れている様子だった。一方のベータは

疲れた様子も見せず、普段通りに無表情に確認をとる。

「それで、聞くまでもないとして貴女もクリッククラックの刺客ということですか」

「そうでありますな。ただ、正直に言えば琥太郎様のこととはどーでもいいのであります」
「というところ？」

びしい、とベータに指を差すソーティス。

「——ずばりい、この私がお姉様より優れていることさえ証明できれば、何も言うことではないのであります。それ故に、お姉様に勝負を申し込むであります」

「生産性がないであります……。ちよつと面倒ですね」

頭を抱えてやれやれ、と頭を左右に振る。もつともその原因としては、ソーティスの視線がちらちらと琥太郎の方を見ているからか。なんだかんだ言いながら気にしている様子は、つまりベータより琥太郎への好感度が高くなりたいたいという意味の表れか。理々は先ほどの「ば」と「ふ」を二乗したようなご褒美プレイじみた行為に激怒しているのもあつてか、琥太郎を背後にやつてにらみつける。唸る姿は子をとられまいとする母猫か何か。状況は一触即発であるが、耕平はなんだかおろおろしているルナーサを見て前傾姿勢を解き始めていた。何か癒されたおかげか、戦闘態勢（意味深）を解いている。

「それで、何をするというのでありますか？ 料理ならそこのルナーサが自爆したので、

ネタ被りになるでありますが」

「!」目に涙を溜めるルナーサ、実際悲しそう。

「んん、直接殴りこみかけるのも面白くないし……、そうであります!」

びし、と腕を組みやや前傾姿勢になり、ボディラインを強調するような体勢をとるソーティス。そして少し見下ろすような何とも言えない、ともすればセクシーな体勢になり。ちらりと横目、耕平にウインクをかました。

「ずばり、お色気対決でありますな!」

「」

「こ、こーへー!」「ちよ、どうしたのよアンタ!」

そしてその場で何故か血を吹いて倒れた耕平に、注意をとられるソーティスであった。

「まあ実際、水着対決になりますかね。お色気といっても我々の学習能力では程度が知れています」

「!?」 えっ? とびつくりした顔のソーテイス。

「それより、水着対決とかそもそもどうという対決なんだぜ……?」